2010
graph magazine vol. 17

主は、生きておられる

Unser HERR lebt



Unser HERR lebt

主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません
（ヨハネ3･3）

vol. 17 | 定価100円（本体95円）

巻頭メッセージ
004 リバイバルの必要性 ― ゴットホルド・ベック

6人の証し
016 主に愛されている恵み ― 辻 純
020 主の最善 ― 飽戸 安子
024 このダメな私をも ― 斎藤 仁子
029 主はあなたの道をまっすぐにされる ― 南 尚佳
034 主のみこころを求めて ― 山田 正志
039 すべてをお委ねして ― 山田 知子

3人のメッセージ
044 牢の中の賛美 ― 富岡 徹郎
050 キリストの苦しみの欠けたところを満たすために ― 岡本 雅文

インフォメーション・ボックス
056 王なるイエス・キリスト ― 高村 昌彦
062 末期の床で綴った愛息への手紙／新会堂の起工式／北米よろこびの巡回

連載メッセージ
064 「聖書は何と言っていますか」 ― ゴットホルド・ベック
―あなたはなぜ信じないのですか？……（上）

各地の集会から
080 こちら横浜集会で～す

メッセンジャーの予定表
082 メッセージ当番表（2010年4月～6月）／喜びの集いスケジュール

ビッキーのケーキづくり
086 マーブルケーキ

088 結婚式・葬儀
090 キリスト集会へのご案内
092 キリスト集会出版物のご紹介

住所録
094 キリスト集会のご案内（2010年1月1日現在）

巻頭メッセージ

リバイバルの必要性

――主よ、私を新たに生かしてください！

ゴットホルド・ベック



主を信じる人々の集いは、いつも「喜びの集い」です。なぜなら、いつでも悔い改めることができるからです。

「悔い改めることはもっともすばらしい仕事だ」と宗教改革者マルティン・ルターは言っています。悔い改めに導かれた人々は、みなに喜びをもたらし、逆に、悔い改めようとしない人々はみなにとって悩みの種となります。

パウロは当時の教会に宛てた手紙の中で、ある信者たちに対しては「私たちは、いつもあなたがたすべてのために神に感謝しています」（1テサロニケ　1・2）と書いていますが、別の信者たちに関して「私は困っている、悩んでいる」と書かなければなりませんでした。ここに、「二種類の信者」がいることが分かります。

例えば、ある信者たちは「主の再臨はまだまだ先のことだ、今、本気で待つことはない」と思っており、それとは別の信者たちは、「主は今日来られるかもしれない」と喜びと期待をもって暮らしています。

また、ある信者たちは、自分のために生活し、自己実現を望んでいますが、別の信者たちは、主イエス様のために生活し「主イエス様に喜ばれたい」と心から望んでいます。

また、ある信者たちは、自分こそが中心になって何かの役割を演じたいと思っており、そうならない場合には不平不満を心に抱えます。しかし、別の信者たちは「主イエス様だけが盛んになればいい、自分自身は決して大切ではない」と思っており、主イエス様だけにすべての栄光を帰して生きたいと望んでいます。また、ある信者たちは、周囲の人々に信仰的なつまずきを与え、分裂を招いていますが、別の信者たちは、いのちがけで集会全体の一致が現れることを望んでいます。

つまり、一方は「暗闇の中」で生活している信者たちであり、もう一方は「主の光の中」を歩いている信者たちです。後者は、マルコの福音書5章にでてくる「十二年の間長血をわずらった女性」のように、主イエス様の前に出て、心から主にひれ伏し、自分の内側をあますところなく正直に打ち明ける人々です。

聖書には、旧約時代、ダビデが主に向かって心から祈り求めた叫びが記されています。

主よ。私を調べ、私を試みてください。私の思いと私の心をためしてください。

（詩篇　26・2）

私たちもまたダビデのように、主に向かい、主の光で自分の内

側を照らし、試してくださいと心から願い祈る必要があります。主の光に照らされると、自分自身が何という小さな存在であるかに気づかされます。主の光の中では、恥ずかしさに顔を上げられなくなり、どうすることもできず、ただ主の前にひれ伏さざるを得ません。サウロもまた、主の光に照らされてはじめて、自分の行動がまったく的はずれで、悪魔的な行いであったことを知りました。(使徒　9・3参照)

「わたしのもとに来なさい」と主イエス様はいつも呼びかけておられます。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」(ヨハネ8・12)とおっしゃっています。しかし、生まれつきの人間は決して光の下に行こうとしません。光の下に出たくないのは、自分の罪を隠しておきたいからであり、正直になることを恐れているからです。光を避けて主に従わず、闇の中を歩み続けることは、不幸への途そのものをたどることになります。

ここで、ご一緒に考えたいテーマは「リバイバルの必要性」です。「リバイバル」は英語ですが、日本語では「霊的覚醒」、または「信仰の復興」、「信仰の復活」を意味します。霊的に「眠ってしまった信者」には、「リバイバル」、「信仰の復興」が必要です。主との生き生きとした交わりによって、霊的に新しくされ、新しいのちで生かされることがどうしても必要です。

かつて私が神学校にいたとき、リバイバルが起こるようにとひたすら求める祈りのグループがありました。このグループは祈りを始める前に、いつも一つの歌を歌っていました。その歌詞の内容は、「主よ、力を送りたまえ。海の大波のように、リバイバルを送りたまえ。そして、わが内を目覚めさせたまえ。」というものでした。リバイバルは、まず、個人的に私たちの内側に起こらなければなりません。果たして私たちひとりひとりに、その備えはあるでしょうか。

これまでにどのような場合にリバイバルが起きたかを見ると、そこには隠れた「祈りの闘士」がいたことが分かります。主に向かって「主イエス様、どうかリバイバルを起こしてください。そうでなければ、私に死をもたらしてください。」と祈る祈りの人が必ずいました。イエス様は、今、この私たちの間にも「祈りの闘士」を求めておられます。「破れ口」に立ちはだかって、人々をとりなす祈りの人を求めておられます。

主はかつて、預言者エゼキエルにこう語られました。「わたしがこの国を滅ぼさないように、わたしは、この国のために、わたしの前で石垣を築き、破れ口を修理する者を彼らの間に捜し求めたが、見つからなかった。」(エゼキエル　22・30)と。

今、果たして私たちは、主の御心にかなう、破れ口に立つ者となっているでしょうか。それとも、主が「捜し求めたが見つからなかった」と嘆き、主を憤らせてしまった者の一人と同じなのでしょうか。

私たちはリバイバルがどうしても必要であるということを深く感じているでしょうか。私たちの内側に、何か重大な問題があることを感じとっているでしょうか。

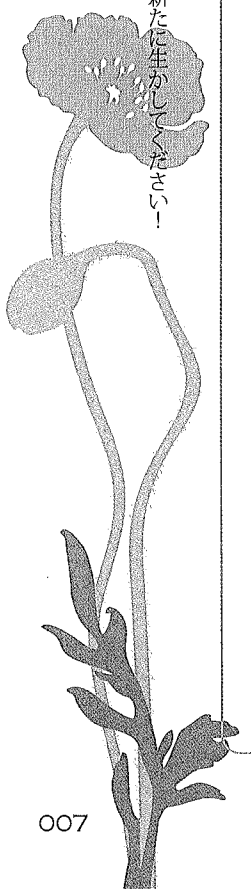
残念なことですが、リバイバルに対する多くの信者の態度は真剣なものではありません。たとえリバイバルのために祈り求めていても、「主の時が来なければ何も起こらないのだから、その時が来るまで待つしかない」と考え、真剣な態度で主に望もうとはしていません。信ずる者のこのように冷めきった、みじめな信仰を見て、主イエス様は喜ばれるでしょうか。

しかし、もし私たちが、リバイバルのために主の備えられた条件を満たすならば、その瞬間にリバイバルは起こり、広がっていくのです。リバイバルとは、「新しく目覚めさせられたいのち」のことです。ここで大切なのは、「新しく目覚めさせられるべきいのち」をもっているのは、真の信者だけだということです。つまり、未信者の人々にリバイバルが起こるということはありえません。未信者の人々は、まず、新しいいのちに生まれなければなりません。ですから、いわゆる「眠ってしまった信者」にこそリバイバルが必要なのです。今の時代、「眠った信者」は実に大勢います。いまや、眠りから覚めなければならない時期が来ています。目覚めるためには、まず、自らが眠りこけ、霊的に死んでいる状態であることを認め、主に告白する必要があります。主イエス様が共におられ、このリバイバルの必要性を私たち一人一人に悟らせてくださるなら、何と幸いなことでしょう。

では、どうすれば待望のリバイバルは起きるのでしょうか。それは、まず「私たちが主に試されること」によって、そして「私たちが主を試すこと」によって起こります。この両方が必要です。

リバイバルの必要性

――主よ、私を新たに生かしてください！



「私たちが主に試される」とはどういうことか、次に見てみましょう。

主に試されるとは

もし、主イエス様が私たちを試されるなら、それは良いしるしと言えます。私たちが自分で自らの内側をどんなに試しても、たずねても、何の役にも立ちません。大切なのは、主イエス様によって、私たちの内側が試されることです。それには、前に見たダビデのような心の態度をもたなければなりません。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

（詩篇　139・23、24）

主よ。あなたの道を私に知らせ、あなたの小道を私に教えてください。あなたの真理のうちに私を導き、私を教えてください。あなたこそ、私の救いの神、私は、あなたを一日中待ち望んでいるのです。

（詩篇　25・4、5）

朝にあなたの恵みを聞かせてください。私はあなたに信頼していますから。私に行くべき道を知らせてください。私のたましいはあなたを仰いでいますから。……あなたのみこころを行なうことを教えてください。あなたこそ私の神であられますから。あなたのいつくしみ深い霊が、平らな地に私を導いてくださるように。

（詩篇　143・8、10）

また、ホセアも告げています。

あなたがたは正義の種を蒔き、誠実の実を刈り入れよ。あなたがたは耕地を開拓せよ。今が、主を求める時だ。ついに、主は来て、正義をあなたがたに注がれる。（ホセア　10・12）

この箇所は口語訳では「主は来て、救いの雨のようにあなたがたに降り注がれる」となっています。主の霊が、雨が降るようにそそがれ、私たちが主の霊によって新しくされると言うのです。そのとき大事なのは、主の霊が注がれる前に、「耕地を開拓せよ」と言われている点です。主の霊が私たちの心を目覚めさせる前に、私たちの心がまず耕されなければなりません。では、私たちの心はどうしたら新しく耕された土地となることができるのでしょうか。私たちが切に願って、自分の内側を主の光によって照らし、試していただくとき、私たちの心は耕されてきます。祈りに応えて、主イエス様は私たちの罪を明るみに出してくださるのです。このとき、漠然とした罪の悔い改めは、あまり価値がありません。私たちは確かに罪を犯したのですから、ひとつひとつ教えられてそれらを悔い改めなければなりません。

「眠った信者」の罪は、主に試されることによって明るみに出されます。その罪は大きく分けて二種類あります。一つは「怠慢の罪」、一つは「欲望」と呼ばれる罪です。では、怠慢の罪とはいったい何なのでしょうか。答えはヤコブの手紙4章17節の次のことばにあります。「なすべき正しいことを知っていながら行わないなら、それはその人の罪です。」これから、その内容を一つ一つ見てみましょう。

1．感謝をしないこと

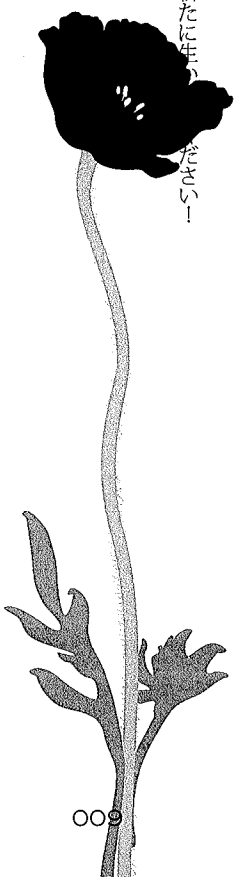
感謝をしないことは一つの罪です。主イエス様は、私たちがまだ罪人だったとき、私たちの罪のためにいのちを捨ててくださいました。私たちは、この主に対し、心の底から感謝を捧げているでしょうか。形式的な、唱えるだけの感謝は罪であり、感謝をしない生活は天の窓を閉じてしまいます。

感謝のいけにえをささげる人は、わたしをあがめよう。その道を正しくする人に、わたしは神の救いを見せよう。

（詩篇　50・23）

このことばを逆に考えるなら「感謝のいけにえをささげない者は、わたしを侮っている。自分の行いを慎まない者には、神の救いが示されない」という意味になり、主イエス様に感謝のいけにえをささげない者には、リバイバルが起こらないことを教えています。

主は、私たちが唇をもって、心から、感謝のいけにえをささげることを待っておられます。私たちが主に感謝をささげられる理由は何でしょうか。主の恵みによって救いにあずかることがで



き、家族の救いも約束されていることです。そして、告白した罪を永久に赦してくださり、また主が心に思い出されることもないと約束してくださったことです。

私たちは主イエス様に感謝していない罪を言い表し、心から主の前に悔い改め、新たな感謝をささげたいものです。

2. 主への愛の欠乏

これもまた、罪です。主イエス様は私たちが心を尽くし、精神を尽くし、ご自分を愛することを願って待ち望んでおられます。純粋な心で主を愛することを待っておられます。

聖書の中に、「主であるわたしは、ねたむ神」（出エジプト20・5）と書かれています。妻が夫を、夫が妻を半分だけしか愛さなかったり、他の人を愛したりすればねたむでしょう。もし、私たちが、心を尽くして主を愛さなければ、主は悲しまれます。

私たちは主イエス様の血潮によって贖われた者であり、私たちのすべては主のものです。私たちの愛もひたすら主に注がれなければなりません。それなのに、私たちの生活を振り返ったとき、主よりも仕事や家族、また自分を満足させることに熱心で、主よりもこれらに忠実に歩んでいるのはどうしたことでしょうか。

あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。

（黙示　2・4）

主イエス様に対する愛の欠乏は、何と大きな罪でしょうか。主イエス様に対して愛の足りない者であることを主に言い表しましょう。そうしなければ、霊的に前進することはできません。自分自身がどれほど主に愛されているか、毎日覚えるべきです。ダビデは心から主に言っています。

主、わが力。私は、あなたを慕います。主はわが厳、わがとりで、わが救い主、身を避けるわが岩、わが神。わが盾、わが救いの角、わがやぐら。

（詩篇　18・1，2）

3. みことばを食べないこと

聖書を読まないことも、また罪といわなければなりません。私たちは時々、また何週間も、喜びを持たずに聖書を読んでいるということはないでしょうか。もし私たちが飢え渇きをもって聖書に接しなければ、またみことばを深く味わわなければ、霊的に一歩も前進しないからといって不思議ではありません。この罪を言い表すならば、主は私たちにみことばに対する飢え渇きを与えてくださり、新しいみ声で、かならず私たちに語りかけてくださいます。主は言っておられます。

このみおしえを書き写して、自分の手もとに置き、一生の間、これを読まなければならない。それは、彼の神、主を恐れ、このみおしえのすべてのことばとこれらのおきてとを守り行なうことを学ぶためである。（申命　17・18、19）

この律法の書を、あなたの口から離さず、昼も夜もそれを口ずさまなければならない。そのうちにしるされているすべてのことを守り行なうためである。そうすれば、あなたのすることで繁栄し、また栄えることができるからである。

（ヨシュア　1・8）

詩篇の作者もみことばを賛美しています。

あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。

……どんなにか私は、あなたのみおしえを愛していることでしょう。これが一日中、私の思いとなっています。……あなたのみことばは、よく練られていて、あなたのしもべは、それを愛しています。

（詩篇　119・72、97、140）

エレミヤもみことばを食べました。

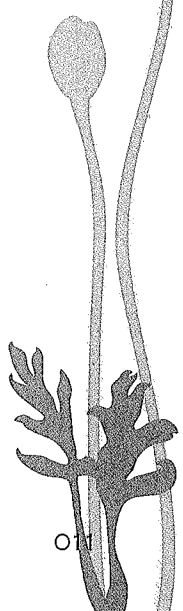
私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。万軍の神、主よ。私にはあなたの名がつけられているからです。

（エレミヤ　15・16）

私たちの信仰生活は、どれだけみことばを食べているか、そのはかりに従い、その程度に比例して成長していきます。

4. 不信仰

「信仰から出ていないことは、みな罪です。」（ローマ14・



23）と聖書は言っています。信仰は主イエス様との結びつきです。主との結びつきがなければ、私たちは罪の中に生きることになります。主だけを大切にしないことは、悪魔を喜ばせることと同じです。この地上のこと、目に見えるものを重大に考えるのは、主イエス様を「余計な者」とすることを意味しています。「信ずる」こととは「主にとどまる」ことです。

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。

（ヨハネ　15・5）

聖書の中には多くの約束のことばがありますが、これらを信じないことは罪です。例えば、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）というみことばがありますが、これを本当に信じているでしょうか。

私たちは、この約束を少しの疑いもなくしっかりと信じて、日々、感謝して歩むことが許されているのです。しかし、主に不信を抱いているならば、主のみわざを体験することはできません。聖書が教えています。

イエスはそこを去って、郷里に行かれた。弟子たちもついて行った。

安息日になったとき、会堂で教え始められた。それを聞いた多くの人々は驚いて言った。「この人は、こういうことをどこから得たのでしょう。この人に与えられた知恵や、この人の手で行なわれるこのような力あるわざは、いったい何でしょう。この人は大工ではありませんか。マリヤの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではありませんか。その妹たちも、私たちとここに住んでいるではありませんか。」こうして彼らはイエスにつまずいた。

イエスは彼らに言われた。「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。」それで、そこでは何一つ力あるわざを行なうことができず、少数の病人に手を置いていやされただけであった。イエスは彼らの不信仰に驚かれた。それからイエスは、近くの村々を教えて回られた。

（マルコ　6・1〜6）

不信仰が支配するところでは、主イエス様はお働きになれないのです。

5．祈りを怠ること

祈りを怠ることも罪です。「まことの祈り」とはどういうものでしょうか。「まことの祈り」は聖霊が私たちを通して祈る祈りです。

私たちは誰に祈るのでしょうか。遠くの神に祈るのでしょうか。もし、遠くの神に祈るのなら、バアルの預言者がしたように大声で叫ばなければならないでしょう。（1列王　18・28）私たちは、全宇宙を支配しておられ、しかも私たちのうちに住んでおられる主に祈るのです。この主に向かってどのように祈ったらよいのでしょうか。イスラエルの人々は、みことばを読み、祈るときにも主の名を口にしませんでした。主なる神を畏れていたからです。私たちも祈るとき、イスラエルの人々と同じように畏れをもって主の御前に出なければなりません。主への畏れをもち、思いをこめ、主の答えを信じて祈ることです。

信仰のない人のことを、「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」（ローマ　3・18）とパウロは書いています。このみことばは、実は多くの信者にも当てはまるのではないでしょうか。主は言っておられます。

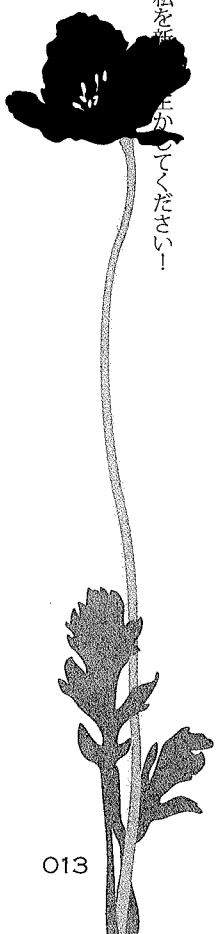
わたしが目を留める者は、へりくだって心砕かれ、わたしのことばにおののく者だ。

（イザヤ　66・2）

主はみことばを畏れる人を求めておられます。私たちは主のみことばにおののく者でしょうか。主を畏れることを知っている者でしょうか。このことについても、自分の内側を主の光に照らしていただきましょう。

6．集会に集まらないこと

集会はもちろん宗教的なクラブではありません。天に引き上げられた主イエス様が「頭」であり、この主の御名によって集まる兄弟姉妹の群れは「頭であるキリストのからだ」です。集会は



「神の家」であり、「真理の柱」、また「土台」であると聖書は言っています。（1テモテ3・15）この「神の家」を思わないことは罪です。

神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。

（マタイ　6・33）

まず第一に、神の義を求めず、神の国を求めることをしないでいろいろな雑事や仕事のために集会に出ない信者がどこにでもいます。もちろん、やむをえない場合もあります。しかし、この点についてもダビデのように「主よ、私を調べ、私を試みてください。私の思いと私の心をためしてください。」と主に祈りましょう。聖書も教えています。

ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。（ヘブル　10・25）

7. 家族・親戚・友人たちへの愛の不足

私たちが関わっている仕事を、家族の救いより大切に思っている人はいないでしょうか。目に見えることで、この仕事は自分に義務として与えられたものである、と考えることはあっても、主が私たちに与えられた義務については、あまり考えていないと言うことがありはしないでしょうか。

私たちの家族はまだ御救いにあずかっておらず、「永遠の滅び」に向かって歩んでいるのに、私たちが無関心でいることができるのでしょうか。家族・親戚・友人のために真剣に祈ることをせず、無関心のまま虚しくすごした日々を思い出さないでしょうか。このことについても、私たちの罪は山のように積まれているのではないでしょうか。

8. 滅びに向かう人々の魂への愛の不足

私たちは自分の周りにいる、多くの人々の滅び行く魂を心から愛しているでしょうか。これらの人々のために、私たちはあらゆる犠牲を払っているでしょうか。私たちが犠牲を払っているかいないかによって、私たちが滅び行く魂を愛しているかいないかが分かります。主がこの罪を赦してくださり、私たちの心に救霊に対する情熱を与えて下さったら、幸いです。

9. 主にある兄弟姉妹のために目をさましていないこと

主にある兄弟姉妹方のことに心を傾けないことも罪です、こういうわけで、神の安息にはいるための約束はまだ残っているのですから、あなたがたのうちのひとりでも、万が一にもこれにはいれないようなことのないように、私たちは恐れる心を持とうではありませんか。（ヘブル　4・1）

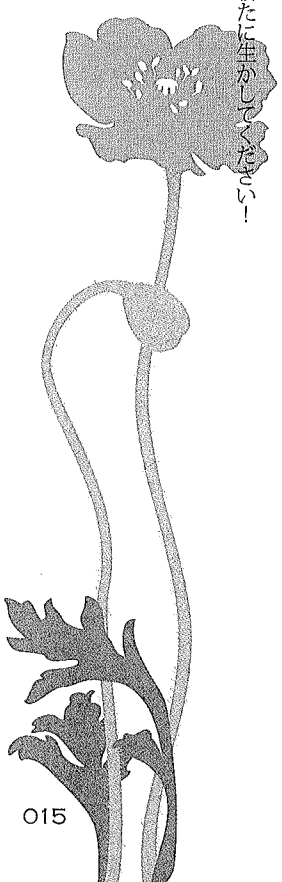
私たちは主にある兄弟姉妹方のために心を用いているでしょうか。兄弟姉妹が霊的に前進するように、ひとりひとりと交わりをもち、心を砕いているでしょうか。これは主に与えられた私たちの「務め」です。私たちの愛する兄弟姉妹、病の床にある方々、弱っている方々、また、救いを求めている方々の名前を書きとめて、日々共に祈り合うことを忘れてはいけません。

10. 自分を捨てず、主に従わないこと

自分を捨てて主イエス・キリストに従おうとしないことは罪です。犠牲を払うことなしに、霊的な成長はありません。自分自身に死ぬことがなければ、永遠に残る実を結ぶことはできません。主の御名のために私たちは忍耐し、辱しめを受け、そしりを受ける備えがあるでしょうか。

こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です。（ヤコブ　4・17）

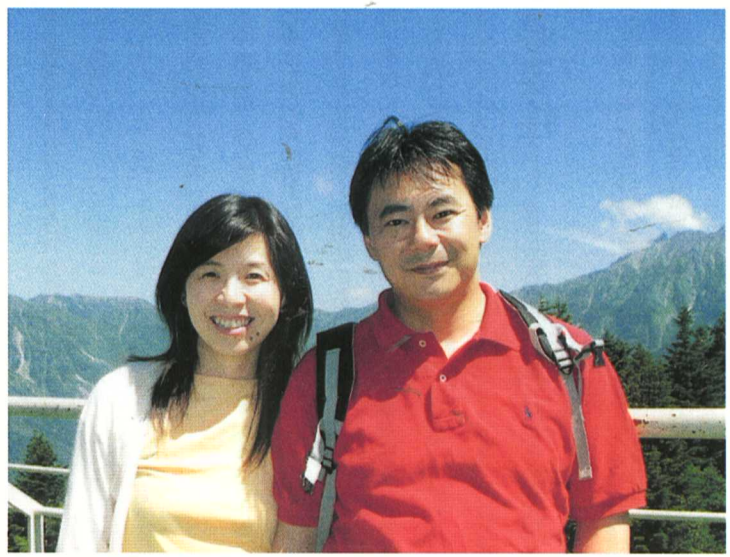
主ご自身がこれらの「怠慢の罪」をご自分の光によって、私たちひとりひとりに教えてくださるなら、幸いです。これらを正直に認め、私たちが悔い改めるとき、豊かなリバイバルが起こるのです。



主に愛されている恵み

辻　純

辻 純さん、夫の陽一郎さん（右）



今、静かに私の今までの歩みを振り返ってみますと、本当に生まれる前から、主がすべてをご計画してくださっていたことに思いを馳せることができます。

私とイエス様との最初の出会いは、近所の教会幼稚園に入った時でした。そこで初めてみことばを教わりました。それからは、日曜学校へ行ったり、行かなかったりでしたが、小学校高学年の頃には、もう行かなくなっていました。さしたる悩みもなく、恵まれた子ども時代を過ごしました。バイオリンで音楽高校に入りましたが、音楽の道が合わなくて悩んだ時、やはりまた教会へ通うようになりました。でも、神様は信じられても、イエス様のことはよくわかりませんでした。その頃、音楽高校での親友が吉祥寺集会で救われ、大学一年の時に、その親友が親子で洗礼を受けるというので、初めて母といっしょに吉祥寺集会へ行ってみました。それ以来、母と吉祥寺集会へ通うようになりました。そして本当のイエス様と出会い、私がバイオリンを習っていたことも、いろいろな悩みも、すべて、主の許へ導かれるためだったとわかりました。

私が自分のわがままと自己中心を悔い改め、心からイエス様を救い主として受け入れたのは、今からちょうど二十年前の二十二歳の時です。それからの結婚生活は四人の子どもにも恵まれ、たくさんの喜びと恵みをいただきました。しかし、それと同時に厳しい試練も多くいただきました。主を信じているにもかかわらず、試練の時、私はいつも信仰がなく愚かでした。しかし、主はみことばのお約束どおり、愚かな私を一度も見捨てず、いつも私を背負ってくださいました。

主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」　**（ヘブル　13・5）**

光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。　**（ヨハネ　1・5）**

二〇〇八年の八月三十一日に、小児科医だった主人、陽一郎が勤務中に、くも膜下出血で倒れました。重篤で、最初は手術もできないと言われましたが、全国の集会の方々が祈ってくださり、一命を取り留めることができました。この時期、毎日、キリスト集会の方々が代わる代わる私を支えに来てくださり、毎日みことばが与えられ、本当に不思議な平安の中に置いていただきました。

しかし、九月二十四日、集中治療室でリハビリのためうつ伏せになっていた主人は突然、心肺停止を起こしました。脳へのダメージが強く、低体温療法でなんとか命をつなぐことになりました。しかし、冷たくなって、目をテープで閉ざされた主人は、生きているようには見えませんでした。私は、主人が召されるかもしれないと思いながら、どうしてもそのことを受け入れられませんでした。主人にもう一度元気になってほしい。家族六人でいっしょに暮らしたい。もう一度、主人が主の証し人として生きてほしい。そのことしか祈れませんでした。ペック兄にそうお話しすると、「もちろんそうよ。で

も、もしそうでなくても、主のみこころだけがなりますように、と祈りましょう。」と言われました。しかし、私は、本当に自分には信仰がないことがわかりました。また、私は自分が妻として失格者であったという罪意識に押しつぶされ、自分は赦され得ないと思いました。けれども、苦しみのどん底での悔い改めに、主は「子よ。あなたの罪は赦された。」と語ってくださいました。

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。（ローマ　3・24）

主は私をあわれんで、主人の命を残してくださいました。主人は二週間後に、奇跡的に体温を戻せました。ですが、意識は戻りませんでした。

でも私にとっては、主人の命が残されたことは感謝で、温かい主人に会えることがうれしくて、毎日のように病院に行って主人に会うことが喜びになっていました。四人の子どものことも、もしそこに、病院で主人のリハビリを支え、私が頑張って主人を回復させなければと、どこかで思っていました。

ところが、主人が倒れて七ヶ月後、こんどは私が階段から転落し、頚椎（けいつい）のむちうちで全く動けなくなってしまいました。

倒れて一ヶ月は、主人のことが心配で、私が行かなければ主人はどんどん悪くなってしまう、と思っていました。

それが、私が倒れてからは、両親をはじめ集会の方々が病院へ行ってくださるようになり、その中にはリハビリ士の女性もおられて、その方を中心に主人のリハビリをしてくださるようになったのです。そして、一ヶ月ほど経った時、お見舞いに行ってくださった方から「陽一郎さん、前よりずっと顔色が良くなって、目の輝きも良くなっていたよ。」と告げられました。その時、私が行かなければ主人はおしまいだ、と思っていた自分のごうまんさが打ち砕かれました。主人は私のものではない、主のものである、とはっきり示されました。

主人は、主の群れの中で主に背負われて、主に愛されている。主は主人を私以上に愛しておられる。それを見せていただいて、私は解放されました。

「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。（哀歌　3・23、24）

また主は、永遠のいのちの中にある素晴らしい恵みを見せてくださいました。

神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。（ローマ　6・23）

この地上は、本当に短い準備期間であること、この世での幸せな家庭生活よりも天国に行ってからいただける恵みの約束の方が素晴らしいことを思わされました。

これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。……しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。（ヘブル　11・13、16）

この希望は失望に終わることがありません。（ローマ　5・5）

今、主人は反応できず、動けませんが、肉からきよめられて、天に宝を積んでいる、と思います。そして、私たちにはわからない目的を持って主は今、主人を生かしていてくださり、主人は今も主に用いられている、主のなさることはすべて最善である、そのことを思うと、感謝と平安で満たされます。

そして何でもおできになる主には、みこころであれば、きょう主人を元気にすることもできます。どちらにしても、御手の中にあることで

辻　純（つじ・じゅん）
1967年千葉県生まれ。浜田山小、東田中、
東京芸術大学付属高校、同大音楽学部器楽科バイオリン専攻卒。
夫陽一郎、長女真理恵、次女百合香、長男光一、三女愛結実。

すから安心です。主の最善を与えてください、と日々祈っています。

また、私が倒れた中で、主人だけでなく、私も子どもたちも、主にある集会の方々から、あふれるほどの愛と助けをいただき、主に愛されているという絶対的な確信を与えられました。そして、まだ主を知らない周りの方々からも、本当に愛をもって助けていただき、主はその方々をも愛し、用いておられることを見せていただき、その方々の救いを心から祈る毎日です。

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。

（1テモテ　2・4）

辻陽一郎さんは三月十一日、天に召されました。この「証し」は、頸椎損傷の身で、重病のご主人をお見舞いしていた時期に書かれたものです。次の、飽戸安子さん（純さんの母親）の「証し」も、同じです。



主の最善

飽戸　安子

前列左から 孫の百合香さん（次女）、愛結美さん（三女）、真理江さん（長女）、光一さん（長男）
後列左から 安子さん、夫の弘さん



自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、私にふさわしい者ではありません。

（マタイ　10・38）

春まだ浅いある夜、やっと眠りについた私の枕元の電話のベルがけたたましく鳴り、いやな予感が全身をよぎりました。二階の階段から落ちてしまったので祈ってほしい、との娘、純からの電話でした。一瞬、不信仰な私の心は不安に凍りつき、その夜は主に祈り、うとうとしては目覚めてまた祈る、ということを繰り返していました。

思えば、その前から、私たち家族には厳しい試練の日々が始まっていました。二〇〇八年夏、娘の夫、陽一郎さんがくも膜下出血で倒れ、一ヶ月ほど生死の境をさまよい、何とか命は取りとめたものの、植物状態になりました。娘は毎日の病院通いと四人の子どもの世話に忙殺され、いつ倒れてもおかしくない状態でしたから、私は娘の健康だけはお守りください、と主に祈る日々でした。そのような中での出来事でしたので、「とうとう」という気持ちと同時に、「なぜですかイエス様、も

うこれ以上負いきれません」という気持ちで打ちのめされました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント　10・13）

必死の祈りにもかかわらず、娘の状態は日を追うごとに悪くなり、一週間後には手の痛みとしびれで、自分で食事をとることもできなくなってしまいました。十年前、私がかかった頚椎（けいつい）症と同じような症状でした。なぜですか、と主に問い、家族には見せられない涙を堪えきれず、親しい姉妹の胸で嗚咽したこともありました。しかし、この最悪とも思える状況こそが、主の最善のご計画であったことを知るのに、そう時間はかかりませんでした。

主は「脱出の道を備えてくださる」という約束どおり、たくさんの助け手を与えてくださいました。

病院の近くに住むキリスト集会の方々が、頻繁に見舞ってくださるようになりました。特に女性信者の方々からは、陽一郎さんの身体が固まってしまわないようにと、リハビリのため毎週通院してくださったり、家事ができなくなった娘に代わって、毎日のようにお食事を作って届けてくださったり…と、ここに書ききれないほどのご奉仕をいただきました。主にある私の妹も毎週、片道二時間の道のりを手伝いに通ってくれています。ただただ感謝と喜びでいっぱいです。苦しみがなければ決して味わうことのできない主の深いご愛を知ることができました。

私にとって何よりも嬉しかったのは、娘が入院しなければならないほどの重症ではなかったことです。看病に追われ、留守にする状態が続いた後でしたので、たとえ寝たきりであっても、子どもたちの身近に娘を置いてくださったことに感謝しました。主のご計画の周到さに、改めて「主は生きておられる」と思わずにはいられませんでした。

また、夫の看病と子どもの世話で心身ともに疲れきっていた娘に、主はこのような形で休息をくださった、ということも解り、心が震える思いでした。

しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。（2ペテロ　3・8）

陽一郎さんの病状は相変わらずですが、超多忙な日々を過ごし、猛ダッシュで走り続け、倒れた彼の病床で、時としてふっと静かな穏やかな顔を見る時、主は彼をいま、ゆったりとした、平安の時の中に身を置かれているのではないかと思います。きっと私たちの一年が、一日ぐらいなのではないのかと。そして今まで主がすべてのことを最善にしてくださったように、陽一郎さんのことも必ず最善へと導いてくださることを確信し、祈っています。

娘の純は、おかげさまで、主のあわれみと皆様方のお祈りに支えられ、最近、日を追って元気になり、散歩も少しできるようになりました。昨年のクリスマスには、車に横になりながらも、九カ月ぶりに子供たちとみんなで陽一郎さんのお見舞いに行くことができ、大きな喜びを与えられました。

悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。（マタイ　5・4）

孫たちも、両親が病で倒れるというこの厳しい試練を通して、平穏な生活では体験できない、多くのイエス様を信じる方々の愛と優しさを学んだことと思います。そしてそれは、この子たちのこれからの人生にとって、大きな力となると確信し、主に感謝しています。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。（詩編　103・1〜2）

飽戸安子（あくと・やすこ）
1938年東京生まれ。
平井東小、小松川第２中、小松川高、不二服装専門学校卒。
夫弘、長女千弘、次女純

このダメな私をも

「わたし（主）の力は、弱さのうちに完全に現われる。」（2コリント12・9）

斉藤　仁子

左から 長岡伊津子さん、斉藤さん、脇坂美穂さん、木藤睦子さん



私が聖書と出会ってイエス様を信じたのは、海外でした。勤めていた会社を辞めて、一人旅をしていた時、イタリアのトリノでいただいたキリスト集会の本がきっかけでした。

主は、あなたを守る方。
主は、あなたの右の手をおおう陰。
昼も、日が、あなたを打つことがなく、
夜も、月が、あなたを打つことはない。
主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、
あなたのいのちを守られる。
主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。（詩篇　121・5〜8）

聖書のことばを支えとして、旅を続けたことを憶えています。

二年ほど前、突然、子宮頸癌の宣告を受けました。このような思いを抱いて、初の入院生活に入ったのです。

しかし、術後二日目くらいから発熱し、下腹部のリンパ節をとったことでリンパのう胞（袋）が大きくなり、両足もむくんできました。私にとって、大変な状態でした。

最初のうちは、（イエス様のゆるしのもとで起きたことだし、みんな祈ってくれている。お医者さんも、三週間くらいで小さくなるって言ってたし。）と安心していました。ところが3週間経っても袋は小さくならず、ますます大きくなり、体重も一〇キロ増えてしまいました。（なんでみんなのように回復しないんだろう。祈りは聞かれていないのではないか。）と思うようになってきました。お腹が苦しく、食事も食べられずに、吐いたりするようになりました。苦しさや痛みで目覚めてからの長い夜。横たわることもできず、ただ座って夜景を見る毎日。いつ、この苦しさから解放されるんだろう。もう、耐えられない。もう、祈れない。イエス様、もう十分です。この命をとってください。と心の中

した。自覚症状は、ほとんどありませんでした。周囲にも癌を患った人がなく、癌になるなどと考えたこともなく、夢ではないかと思いました。

集会の知人が、東京の癌専門病院の先生を紹介してくださいました。そこではっきり病名を告げられ、「子宮は残せません。」と言われた時は、涙が止まりませんでした。手術前検査の頃のことは、泣きすぎてよく憶えていないほどです。

しかし、みなさんが祈ってくださり、励まされているうちに、不思議と落ちつきを取り戻してきました。そして、この病にも何か、神様のご計画があるに違いない、と思いました。

今まで大勢の癌になったクリスチャンのお話を聞いてきたのです。自分も同じように、苦しみの中にあっても、平安や喜びを体験できるのではないか、と思いました。私もきっと、苦しんでいる方に、クリスチャンの諸先輩方のように、聖書のことばを伝えたり、勇気づけたりすることができるに違いない、そんなふうに思え

で叫んでいました。

主治医の先生はお忙しい中、朝晩、熱心に回診に来てくださいました。しかし、肉体的にも精神的にも限界だった私は、泣き言を言ったり、先生の指示にも従わず、困らせるようになっていました。とにかく、相当なわがままぶりだったようです。

その後、二度目の入院の際には、同室だった患者さんが、私へのお見舞いだけでなく、「あんたのことだから、また先生に迷惑かけてるんでしょう?」と、先生への菓子折りまで買ってきてくれたほどです。

このような状態が続く中、ある時、先生が「しっかりしなさい。あなたには、神様がいるんでしょう。」と言ってくださいました。本来なら私がみなさんに伝えるはずだったイエス様のご愛を、主はクリスチャンでない先生の口を通して、私に示してくださったのでした。

「長野から毎週、お見舞いに来てくださっているご両親には、『ありがとう』って言ったの?」とも聞かれ、「言ってません。」と答えると、「あなたに足りないのは、『感謝』のひとことです。」とも言われ、ほんとにイエス様に叱られている気持ちでした。

同室の患者さんたちにも、たいへん助けられました。実は私より深刻な状態にある患者さんたちが、歯ブラシをはじめ、私が言う必要な物をすべて取って来てくれたり、吐きそうになれば、ビニール袋を持って背中をさすってくれたりしました。泣いていると、「しっかりしなさいよ。痛いのは、みんな同じなんだから。」と、励ましてくれました。

その方たちが退院する時には、主治医の先生が「今まで仁子さんの面倒を見てくれてありがとね~。」とお礼を言ってくださっていました。入院当初は、ごうまんにも、神様を知らない患者さんたちを助けるのだ、と考えていたので、こんなはずではなかった。正反対の状況だ。私はほんとはこんな情けない人間にすぎなかったんだと、骨身にしみました。

患者さんたちの中に、忘れらない人がいます。三十代のきれいな女の人でした。「自分はなんて、不幸なんだ。」と私が泣いていた時、入院してきました。私の不幸話を聞いたあとで、彼女は静かに、「手術ができるだけ、幸せよ。」と言いました。私は初めて、手術もできない人がいるんだ、と知りました。

彼女が抗がん剤治療に耐えている姿を見て、私は、自分がどんなに、自分の事しか考えられない、わがままな者だったかを知りました。そして、イエス様を知らない彼女との出会いを通しても、私は再び、希望をもって祈ることができるようになりました。

それから彼女とは、検診のたびに食事をしたり、買い物へ行ったりして、仲良くなりました。ところがある時、彼女の具合が悪いと聞きました。ほんの二週間前に話をしたばかりだったので、驚きました。とにかく病院にと、無我夢中で新幹線に飛び乗りました。急いで病室に入ると、目もあけられず、とても苦しそうな彼女がいました。少しは話ができると思っていたので、立ちすくんでしまいました。お母さんを亡くした彼女は、東京でひとり暮らしをしていました。病気がちのお父さんは、ずっと彼女の名前を呼んでいました。抗がん剤の副作用が激しかった頃、「一人でどうしてるの?」と聞くと、「ただ、じっと我慢してる。」と言っていた彼女。一体どれほどの時を、彼女は、一人で耐えてきたのかと思うと、涙が止まりませんでした。

ご家族の了承を得て、彼女の手をとり祈りましたが、動揺して泣いてばかりで、うまく祈れませんでした。冷静に祈れなかったことを後悔し、落ち込んでいましたが、数日後、ご家族の方から、彼女は、私が行ったその夜に亡くなったとの連絡がありました。間に合った。祈ることができたのだ。と思いました。

かつて(どうして、こんなにいい人たちが、一生懸命に生きようとしている人たちが、こんなに苦しまなくてはいけないんだろう。)と、悩んだこともありました。でも、イエス様は、ひとりひとりを愛してくださって、ちっぽけな人間の考えを超えた、壮大な計画をもっておられる。

斉藤　仁子（さいとう・じんこ）
1965年　長野県須坂市生まれ。
須坂高校卒、実践女子短期大学卒。
野村證券株式会社を経て、軽井沢町保育園に勤務。
2009年6月より児童館に異動し現在に至る

生きているわずかな期間の幸せよりも、永遠に続く天国での幸せを考えてくださっておられるのだ、と思い、祈りました。

仕事復帰初日、両足がむくんでしまう、リンパ浮腫を発症してしまいました。この合併症は、一度発症したら完治できない、とのことで、再び大変落ち込みました。しかし、病院で出会った知人たちの死を通して、「自分が残された意味」を考えるようになりました。合併症治療も含め、合計三回、三ヵ月半に及ぶ入院生活でした。その中で出会った多くの方々、幾人かはすでに亡くなられ、幾人かは、今も苦しい治療を続けておられます。何よりも、本当に頼るべきもののない人生ははかなく、一歩先のことは、誰にもわかりません。

みんなを勇気づけるつもりが逆に励まされ、喜んでいるはずが泣いてばかり、弱さとわがままのし放題、クリスチャンの理想として思い描いていたものとは、まったく逆の入院生活でした。恥ずかしいけれど、これが自分本来の姿なのだとわかりました。私自身には、誇るべきものなど何もありません。イエス様だけが素晴らしく、イエス様だけが、ほめたたえられるべきお方であられることを、私のたましいは良く知っています。私自身には、イエス様の素晴らしさをお伝えする力もありませんが、イエス様ご自身がお語りになってくださいますよう、一人でも多くの方が、私のように、「ダメでもいいんだ。このままで。イエス様のみもとに行きさえすれば。」というやすらぎを、ご自身の救いとして受け取っていただけますよう、心からお祈りしています。

主は与え、主は取られる。
主の御名は、ほむべきかな。（ヨブ記　1・21）

このように、心から言えたらと願っています。

主はあなたの道をまっすぐにされる

南　尚佳

左から 母、南みちえさん、父、昌雄（かずお）さん、尚佳さん



主よ。私は知っています。人間の道は、その人によるのでなく、歩くことも、その歩みを確かにすることも、人によるのではないことを。
（エレミヤ　10・23）

小学六年生の頃、死ということに漠然とした恐れを感じた時期がありました。中学二年生の時、同居していた父方の祖母の死を通し、人生で初めて死という現実に直面しました。

祖母は戦争未亡人で、戦後商売をしながら、四人の子育てをした気丈な人でした。子どもたちの成長後は、商売を父に譲り、自分は朝早くから夜遅くまで農作業に励んでいました。祖母が、食事中に嘔吐し、胃がんになると吐くらしいと私に話したのを覚えています。その時すでに祖母は胃がんを患っていたようです。それから一年ほど後、長女の嫁ぎ先の医院に入院しました。切除不能の胃がん末期でした。孫の私たちには病状は一切話されませんでした。治る病気と聞かされていたため、祖母と別れることになるとは思ってもいませんでした。祖母が危篤

になり、深夜二時頃、私と弟は父母に起こされました。寝耳に水とはこのことです。車で一時間余りの病院に着いた時、祖母はとても苦しそうに、あえぐような呼吸をしていました。この苦しみは生きている間続くのだと思いました。

別室で仮眠し、早朝に起こされた時、祖母は静かになっていました。六十歳でした。苦しみから解放された祖母を見て、死には最終的な解決があるのだと感じました。この時、死の本質を知りたいと強く思いました。また、自分の真ん中に埋められないブラックホールのようにポッカリと空いた穴があり、どうしようもない思いを抱いて、思春期、青春期を過ごしました。

自分の最も深いところで、死や存在の問題の解決を無意識に探し続けていました。

高校時代は受験などで自分をごまかして乗り切り、医学部を志望し、地元の大学の医学部に入学しました。その頃、医学部卒業後は医局に所属するのが普通でした。卒業試験も始まり、入局先を決める時期が近づきました。十年前の思いが強くよみがえってきました。これからの人生のために、死の問題を解決することが不可欠だと思い、死に接する機会がある消化器内科を選びました。臨床研修が始まり、亡くなっていく患者さんたちを一生懸命診療しました。でも、死に至る身体的な過程は見せていただいたのですが、本当に知りたいことは何一つつかめなかったのです。感性の問題ではなく、何か重大なことを見落としていると思いました。その頃、研修医二年目で西条市の済生会西条病院に赴任し、西条駅前に住んでいました。藤田光男さんの紹介で、隣りのアパートに住んでいた内田愛子さんとしばしば行き来するようになりました。初めは雑談だけでしたが、しばらくして愛子さんはクリスチャンであることを打ち明けました。私はこの人がクリスチャンなら、自分もなれるかもしれないと思いました。愛子さんは、医師の私がイエス様に出会うようにと、祈りに祈っていたようです。愛子さんからはキリスト集会発行の「光よあれ」第4集をいただきました。この本には、どのようにしてイエス様と出会い、救われたか、それによってどんな恵みをいただいたかという、キリスト集会の方々の「証し」が収録されていました。がんで召された人の「証し」も多く載っていました。ガンの末期は手の施しようがなく、本人だけでなく、家族も医療者も、死を待つ過酷な時間を過ごすことになります。そのような状況で信仰を持つ方々は輝きを持って、死を直視し、かつ自分の周囲や同じ苦しみにある方々の幸いすら祈っていました。死が天国まで切れ目なく続いていました。人間の限界の向こうに、神の領域が明らかに存在することを知りました。私はこれらの「証し」を毎晩、眠る前に読み続け、その都度、涙を抑えることができませんでした。そして、その後、ウオッチマン・ニー著「十二かご」を何度も読むうちに、イエス様を救い主と信じる信仰に導かれました。天国への「狭き門」を通ることができたのです。

私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。（2コリント　4・7）

心を尽して主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。（箴言　3・5，6）

ここに上れ。（黙示録　4・1）

これらのみことばから、人間は土の器にしかすぎず、主が内に入ってくださり、主の導きに従って天国へ続く道を歩んでいくのが人生なのだ、とわかりました。いつの間にか私の中のブラックホールが消滅していました。そして、身内の救いを真剣に祈るようにもなっていました。

その頃、東久留米市滝山に住む七歳の従弟が脳腫瘍の末期でした。母親である叔母は数年前に二十歳の長男を海辺の事故で亡くしていました。叔母を助け、支えることのできるものは、この世に存在しません。愛子さんと二人でみことばを選び、叔母に五通の手紙を書きました。従弟のお見舞いを一九九一年十二月に予定していましたが、その十日ほど前に従弟は天に召

されました。それでも予定通り上京し、滝山の今川さん宅のクリスマス会に行く機会が与えられました。愛子さんと待ち合わせ、叔母と東京在住の従姉妹二人を誘っての参加でしたが、家庭集会は私にとっても初めての体験でした。

三十歳の時、松山市から済生会西条病院に二度目の赴任をしました。その頃、西条はご婦人たちのお世話で、不定期に家庭集会が開かれるようになっていました。私の借りていたアパートの一室でも家庭集会をすることになりました。やっているうちにだんだん負担になりました。しんどいなと感じながら、自転車に乗っていた真冬の風の強い日のことです。山からふき下ろす強風でなかなか進めない時、風の中でサタンと戦っておられるイエス様を感じました。

私ではなく、戦ってくださるのはイエス様であり、私はただ委ねればいいのだと思いました。

イエス様頑張れ、イエス様頑張れと言いながらペダルを踏んで帰ったことを覚えています。

一九九五年二月にそのアパートで開かれた家庭集会にはベックさんが来られ、十畳半の部屋に五十余人が集いました。しかし、このときにはあまり負担を感じませんでした。集いの準備をする労を、それまでで最も軽く感じました。自分の力ではできないことが百%わかったからだと思います。

神は海を分けて彼らを通らせ、せきのように水を立てられた。神は、昼は雲をもって、彼らを導き、夜は、夜通し炎の光で彼らを導いた。

（詩篇　78・13、14）

一九九六年十二月に光藤めぐみさんが天に召され、一九九六年三月に松山よろこびの集いが開催されました。これらのことが契機となって、一九九六年四月から松山で日曜礼拝・福音集会が始まり、今日に至っています。

二〇〇〇年夏、運転に慣れていた渡部初美さんの誘いと導きで自分の車を運転して、宮崎英子さんと三人で御代田の福音センターに行きました。それから、毎年のように夏は車で、身内

南　尚佳（みなみ・ひさか）
1963年愛媛県生まれ。
川之江南中、川之江高校、愛媛大学医学部卒業、
済生会西条病院勤務

を誘って御代田に行くようになりました。滝山の叔母や叔父や従弟、それから弟家族、父母など皆が元気で集まれるうちに、と次々誘っています。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

イエス様は二千年前、私たちの罪の身代わりとして十字架にかかってくださり、すべてのことを完了させてくださいました。この事実に感謝し、聖書のみことばを通し、生きて働かれる主に一人でも多くの方が出会われますように祈っています。

キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ、知恵を尽して互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。

（コロサイ　3・16）

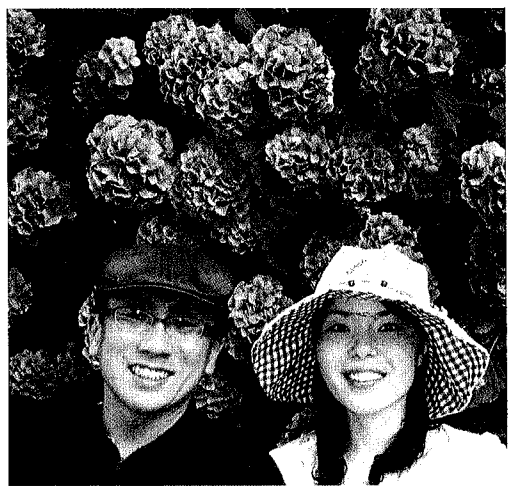
松山キリスト集会の方々と一緒に。後列中央が、尚佳さん



主のみこころを求めて

山田　正志

山田正志さん、妻の知子さん



福岡で生まれ育った彼女と、一度も九州へ足を運んだことのない信州生まれの私が結婚したのは、まさにイエス様のお導きです。

彼女との縁談があったのは昨年（二〇〇八年）七月でしたが、当時、二つの理由から私はこの縁談を素直に喜ぶことができませんでした。

まずは仕事の問題です。以前勤務していた社会保険庁（長野社会保険事務局）が、分割、解体されることになり、十月に現在の職場へ転任したのですが、当時は転任が内定していただけで、勤務地も仕事の内容もまったく分からない状況でした。そのような中で結婚について考えることは難しいと感じましたし、年金記録問題、ねんきん特別便に絡む連日の窓口対応などで心身が疲れていました。

もう一つは結婚の考え方の問題です。十七歳の時に洗礼を受けた私は、将来結婚するならば、同じイエス様を主としている方としたいと考えてはいましたが、そのことを特に強く祈ってきませんでした。聖書は**「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」（マタイ　6・33）**と記しており、イエス様から離れさえしなければ、結婚についても、最もふさわしい方を最もふさわしい時に、イエス様は与えてくださる、と考えていたからです。

これまでにもキリスト集会の方々、友人のご好意により、幾つかの縁談はありましたが、話はまとまらず、次第に結婚することはイエス様のお考えではないと考えるようになりました。聖書のどこにも「結婚しなければならない。」とは書かれていませんし、独身生活の不自由さもあまり感じてはいませんでした。イエス様が私を愛してくださり、私を導いてくだされば、独身でも何とか生きていけると思うようになりました。

そのような中での彼女との縁談であったため、会うべきかどうか非常に悩みました。福岡県の方ですし、お会いして話がまとまらなければ、お互いに金銭的な負担、肉体的な負担、精神的な負担をするだけになるからです。このまま会うことなく、話が立ち消えになってしまえばいいとも思いましたが、どうしたらよいのか分からず、ひたすらイエス様へ祈りました。

イエス様は、これまで私が縁談に対し、誤った姿勢、態度で臨んでいたことを明らかにされました。**「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」（エペソ　2・8）**と聖書に記されていますが、これまで与えられた、衣食住はもとより、仕事、友人、職場の同僚、社会的な立場などのすべてはイエス様の一方的な恵み、賜物であり、縁談についてもイエス様からの賜物としてもっと謹んでお受けするべきでした。しかし、実際に会ってみなければ何も分からない、イエス様からの贈り物かどうかは分からないと、自分の目、頭で結論を導き出そうとしていたことを示されました。

イエス様はなぜ、縁談という手段を用いて彼女と私を引き合わせようとしておられるのか。それは、友人としてではなく、福岡県に住む一人のクリスチャンとしてでもなく、生涯の伴侶として引き合わせようとしておられると考えるのが最も自然だ、との結論に達しました。私のことも、彼女のこともすべてご存知のイエス様が敷設された道であると思いました。「見ずに信じる者は幸いです。」とヨハネの福音書21

章29節は記しています。私は、背後におられるイエス様が導いてくださると確信し、まだお会いする前でしたが、彼女を伴侶として無条件に受け入れることにしました。

私は、彼女を伴侶として無条件に受け入れること、また、会うなら私と同じ決意で臨んで欲しいこと、そうでないのなら会うつもりはないことを伝えました。彼女は会う前に私を伴侶として受け入れることはできないが、私の思いを重く受け止め、結婚について真剣にイエス様へ祈り、求めていくことを約束しました。

昨年八月十五日、小諸市にある私の実家で初めて彼女と会いました。初対面のことはあまり鮮明に覚えてはいませんが、イエス様がこれからどのように私たちを導こうとしておられるのか楽しみでした。御代田で喜びの集いが行われていた十七日までの滞在期間中は彼女とありとあらゆる話をしました。イエス様は私たちの交わりを祝福してくださいました。彼女を伴侶として受け入れる決意はしていたものの、三日間の交わりによって、イエス様は私たちを間違いなく結婚へと導かれる、との確信が強まりました。どんなことも包み隠さずに率直に話す彼女に私は強く惹かれました。両親や兄弟から十分な愛を受けることができず、施設で育った彼女をイエス様は特別に愛してくださったこと、深い憐れみによってずっと導いていてくださったことを知り、深く感動しました。八月十七日は私の誕生日ですが、彼女はイエス様が私に与えてくださった誕生日プレゼントだと思いました。

彼女が福岡へ戻った四、五日後、彼女から正式に結婚を受諾するとの返事をいただきました。あまりの早さに驚きましたが、イエス様が彼女を導いてくださったと素直に喜ぶことができました。早速、両親がベックさんへ経過を報告し、十一月十五日に結婚式を執り行うことが決まり、彼女へもその旨を伝えました。

ところが、さらに四、五日後、彼女から今回の話を白紙に戻したいとの申し出がありました。何が彼女の気持ちを百八十度換えてしまったのかまったく理解できず、イエス様からの贈り物をむげに断る彼女の信仰も理解できず、困惑しました。一回受諾しておきながら、たった四、五日で白紙に戻してしまう彼女の軽率な行動に怒りも覚えました。しかし、メールをしても電話をしても、すでに彼女の心は頑なになっていました。

結婚の撤回の申し出から数日後の九月一日、転任の内示がありました。転任が内定していた時点で県外への異動は覚悟していましたが、彼女のことばかりを考えてはいられない状況となりました。九月中旬、遅い夏休みをいただいていた時、ベックさんとお交わりする機会があり、彼女のことは手放すようにと言われました。再び状況が変わるまで彼女との連絡は絶ち、静かに祈っていくしかありませんでした。

再び事態が動いたのは昨年十二月でした。母が彼女へクリスマスカードを贈ったことがきっかけで、彼女が私と私の両親へ自身の行動について、会った上で謝罪したいと申し出てきたのです。私はイエス様が再び動き出したとうれしくなりましたが、謝罪といってもただの平謝りかも知れないとも思いました。結婚を白紙にしたことを取り消し、再び結婚について祈っていくという謝罪でなければ会う意味がありません。母がベックさんと相談し、ベックさんが彼女の意思を確認してくださることになりました。結婚について再び祈っていくつもりならば会う、ただの平謝りなら会わない方がよいということになりました。

十二月三十一日、彼女は喜びの集いへ参加するために御代田へ来ました。ベックさんが彼女の意思を確認してくださった後、彼女は実家へ来ました。久しぶりに見た彼女の表情は暗く、謝罪も何を言いたいのかさっぱり分かりませんでしたが、イエス様のみこころだけを求めて再びゼロから祈っていきたいとのことだったので、彼女の謝罪を受け入れることにしたのです。

前回の彼女の行動から、今度は慎重にならざるを得ないこと、また昨年末の彼女の表情、話しぶりなどから彼女が結婚を再び受諾するには相当な時間がかかると思いましたが、イエス

山田正志（やまだ・まさし）
1975年長野市生まれ。
高崎経済大学経済学部卒。
厚労省関東信越厚生局神奈川事務所勤務

様は彼女を劇的に変えてくださいました。電話とメールでの交わりが中心でしたが、日々彼女が変えられていくのが分かりました。今度は一時的な自分の気持ちの浮き沈み、感情の抑揚ではなく、周りの人たちの意見でもなく、イエス様ご自身のお考え、みこころだけを求めていることが実感できました。そして二月二十二日、彼女は私との結婚を受諾してくれたのです。

宗教改革などで有名なマルティン・ルターは次のように言っています。「ほんとうに良い考えでも、神は、しばしば、聖徒たちの計画を破られます。それはこのような立派な考えを通して、偽りの邪悪な良い考えが入ってこないようにするためであり、また、私たちの考えがどんなに良くても、なお、神のみこころとは比べものにならない貧弱なものであることを学ぶためです。」

結婚の計画をイエス様は一度完全に絶たれました。しかし、私たちを失望のまま終わらせるためではなく、より良いものとされるためだったのです。

最後に新約聖書、ローマ人への手紙5章1節から5節を紹介させていただきます。

「信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。」

クリスチャンは失望しないとは記されてはいません。これからの人生、仕事も彼女との夫婦生活も失望してしまうことは必ず起こると思います。しかし、失望のまま終わることはない、というみことばのご真実に信頼し、これからも彼女と祈りながら歩んでいきたいと思います。（二〇〇九年五月五日、結婚披露茶話会で話された「証し」です。）

すべてをお委ねして

山田　知子



私は、家庭の事情により、生後一週間で児童養護施設へ預けられ、高校を卒業するまでそこでお世話になりなした。

幼少期の記憶はあまり残っていませんが、大好きだった先生が帰宅されるのを泣きながら後追いしたことはよく憶えています。両親がそばにいない私にとって、その先生は欠かせない存在であり、大きな支えでした。

小学校二年生のころ、初めて家へ帰りました。不安と緊張から食事がのどを通らない私に対し、父は快く思わず、私を隣の真っ暗な部屋に閉じ込めました。私は家族、特に気分しだいで怒り、時には暴力的になる父に対して完全に心を閉ざしてしまいました。

中学生までは、どうにか紛れていた突如として襲いかかる不安や孤独、将来に対する悩みなどが、高校へ進学し、施設の卒園を意識すると、紛らわすことができなくなり、私に押し迫まりました。しかし、弱音を吐いてはならない、少しでも吐いてしまうとすべてが崩れそうになる、頑張ること、努力することが大切だと自分

に言い聞かせ、内にある思いに目を向けないように、自分をごまかしながら高校三年間を過ごしました。高校の卒業が目前に迫まり、これからは何を頼りに生きていけばよいのか、私は図書館へ行き、さまざまな本を読みあさりましたが、どの考えが正しいのか理解できませんでした。

そのような時、子どものカウンセラーとして私の在籍していた施設で働いておられた別所友子さんとお話しする機会が与えられました。彼女は聖書からいくつかのみことばを示し、キリスト集会へ私を誘ってくださいました。「宗教か、嫌だなぁ。」とは思いましたが、変な勧誘をされたり、嫌だったらすぐに帰ればいいと思い、思い切って集会へ足を運ぶことにしました。会場は大勢の方々による賛美歌が響きわたっていました。それがとても心地よく、ホッとしたことを憶えています。初めてお会いしたベックさんへ私は「神様は本当にいらっしゃるのですか。」と率直に尋ねました。ベックさんはいろいろなことをお話されましたが、唯一心に残ったことは、「知子は今まで一人で生きて来たかのように思っているでしょう。でも、知子のことを大好きな神様はいつも一緒だったし、これからも一緒だから何も心配しなくていいよ。何でも神様へお話しするといいよ。」と言われたことです。からっぽだった心の穴が埋まり、喜びが満ちあふれたのを思い出します。うれしくて、うれしくて、施設の職員の方や学校の友だち、先生に話し回っていました。

「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。見よ。わたしは手のひらにあなたを刻んだ。」

（イザヤ　49・15、16）

高校を卒業後、美容師を目指し就職したものの、うまくいかず、挫折してしまいました。そのような時、卒園した施設の園長先生から、戻って施設で働いてみないかとのお誘いをいただき、働かせていただくことになりました。

施設では調理師として五年間、保育士として五年間働かせていただきましたが、自分と同じ経験をしている子どもたちや職員、心理士の先生方と接しながら、逆に私の過去に受けた傷が癒されました。施設で育ったことも、卒園した施設で働かせていただいたことも自ら求めていたことではありませんでしたが、イエス様は私にとって最善の道を備えてくださったのです。

さて、昨年の七月、正志さんとの縁談が持ち上がってから少し経ったころ、正志さんから初めてメールが届きました。内容は「僕は知子さんとのお話を主イエス様からのものとして受け取りました。まだあなたと会ったことも話したこともないけれど、あなたを生涯の伴侶として無条件に受け入れます。だから、あなたもこのお話がイエス様からのものという確信を持って会って欲しい。そういう気持ちがなければお会いしません。」というものでした。当初、会う前から結婚を決めることは無理だと思い、一度お断りしたのですが、もし私が彼の立場だったら、私のように施設で育ち、問題のある家族を抱えている人との縁談は即お断りするのに、彼の信仰はすごいと思わされ、「会う前に結婚は決められないけれど、会ってみたい。」とメールでお返事しました。彼はしばらく考えられたようでしたが、会うことを承諾してくれました。

初めて正志さんにお会いした時、一緒に居て、無理なく、何でもお話しできる方だと感じました。念願だった家族ができるということと、幸せになりたいとの思いから、福岡へ戻ってから四、五日後に結婚をお受けすることにしました。

最初はこの結婚はイエス様のお導きであると感じ、喜んでいたのですが、故郷を離れ、見ず知らずの場所へ行くこと、友人や親しくさせていただいた方と離れ離れになること、彼のことをまだよく知らないことなどの思いが増してきました。不安で、不安で、どうしようもなくなり、すっかり気持ちが沈みこんでしまいました。結局、結婚をお受けしてから1週間も経たないうちにお断りしてしまったのです。この私

の軽率な行動が、一部のキリスト集会の方々に誤解を与えてしまいました。自らが招いたこととはいえ、親しくさせていただいていた方々が私から離れていくように感じました。そのような中で、イエス様は、私がイエス様よりも人間に頼っていたことを気づかせてくださいました。

昨年十二月、彼のお母さんがらクリスマスカードが届きました。もしかしたら彼も彼のご両親も誤解しているのではないか、はっきりお断りしたはずなのに、未だに私との結婚について祈っているのではないか、もしそうならば、もう一度はっきりと彼と彼のご両親に謝罪をしなければとの思いに駆られ、年末年始に長野県御代田の国際福音センターで行われた喜びの集いに参加することにしました。

十二月三十一日、センターに到着するや否や、ベックさんとのお交わりの時が与えられました。ベックさんは「彼も彼のご両親も知子のこと大好きになったよ。」と言われました。私は「彼に対する気持ちはありません。」と答えましたが、「彼のことまだよく知らないでしょう。昨年は『はい』も『いいえ』も早かったよ。イエス様は十字架にかかる前に『私の思いではなく、みこころだけがなりますように。』と祈られたよ。」と言われました。私は「何がみこころなのかわかりません。でも、あなたのみこころに従いたいです。助け、導いてください。」とイエス様へすがる思いで祈りました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。—主の御告げ。—それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ 29・11）

その時に与えられたみことばです。

その後、正志さんの実家へ行き、彼と彼のご両親へ謝罪をし、イエス様のみこころだけを求めて、もう一度彼との結婚について祈っていくことになりました。

彼とは毎日のようにメールや電話でお交わりしましたが、「好き」という感情はなかなか湧き上がって来ませんでした。

「イエス様、彼との結婚はみこころですか。あなたのみこころなら従いたいです。あなたの与えてくださるものは私の思いをはるかに超えて完全であり、最善です。どうぞ私を導いてください。」と祈る日々が続きました。また、イエス様は人の意見や自分の一時的な感情や気持ちの抑揚ではなく、私の意志でイエス様の備えてくださった道を選択することを望んでおられると思うようになりました。

二月に彼と京都でお会いしました。最後に彼に見送られ、新幹線が動き出すと、涙があふれて止まらなくなりました。ハンカチで口を押さえ、声を押し殺しながら泣きました。とても不思議な感情でした。その時、「あぁ、イエス様はこの方を結婚の相手として与えてくださったのだ。だから何も心配せずにイエス様の道に従えばいいのだ。」イエス様から確信をいただいた瞬間でした。

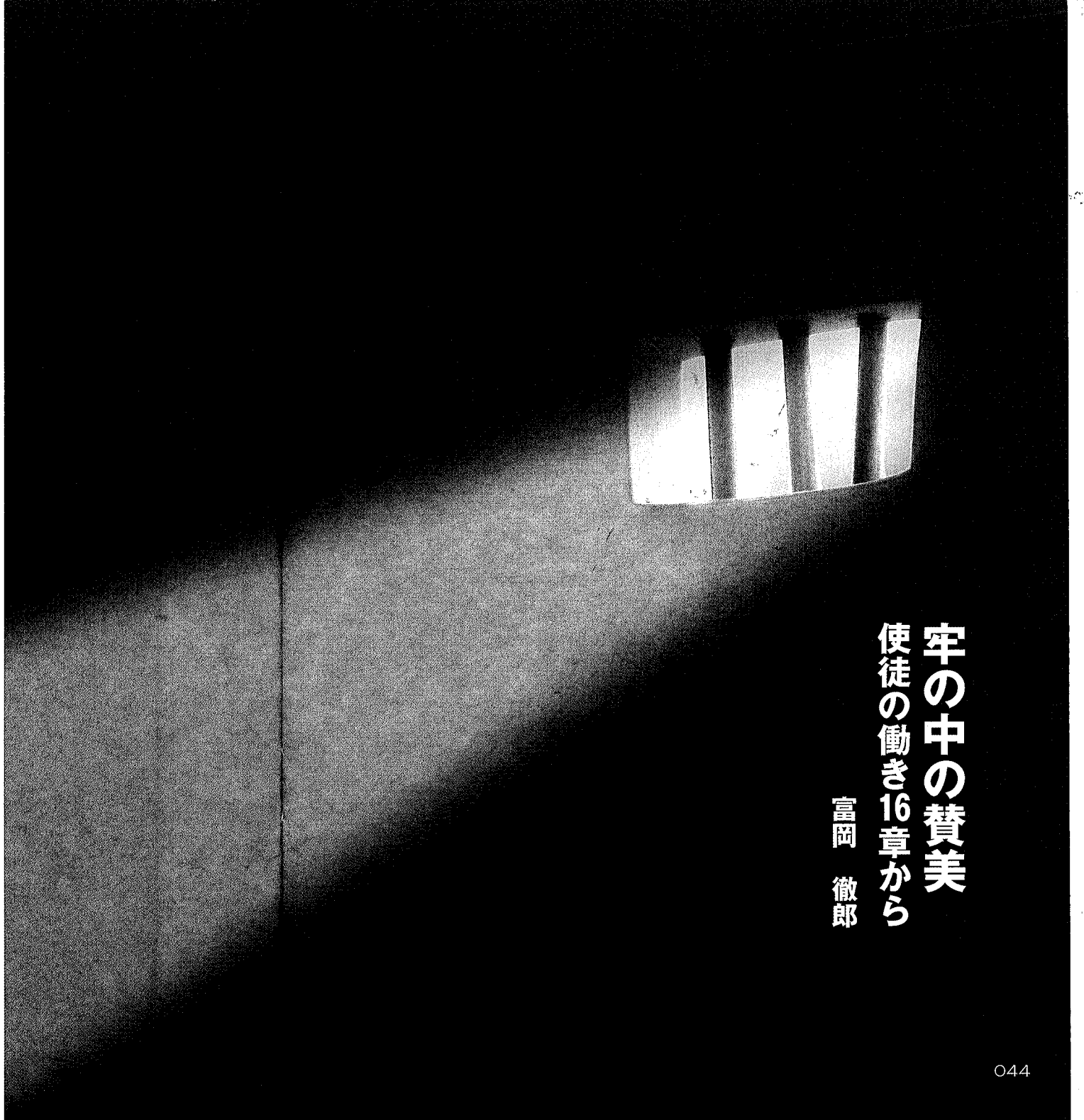
それから、イエス様は私に語り続け、今日まで導いてくださいました。これからも彼と祈り、イエス様のみこころだけを切に求めて歩んでいきたいと思っています。

（結婚披露茶話会で、新郎、正志さんに続いて話された「証し」です。）

山田知子（やまだ・ともこ）旧姓吉田
1978年福岡市生まれ。
大牟田商業高校卒。
夫正志。

前列左から、知子さん、夫、正志さん。後列左から、坂井綾子さん、野田京子さん、丸山紗八さん。





牢の中の賛美
使徒の働き16章から

富岡　徹郎

何度もむちで打たれたうえに息が詰まるような狭い牢に閉じ込められ、いつ出られるかもわからない。それが新約聖書の使徒の働き16章に出てくるパウロとシラスの置かれた状況でした。パウロにとっては、むちで打たれて牢につながれたのは生まれて初めてのことだったでしょう。二人は、イエス様のことを語って町の人々を混乱させたという訴えだけで、弁解の機会は与えられませんでした。よく調べられもせずに足かせをつけられ奥の牢に入れられてしまいました。

人から誤解をうけ、不当に扱われるのはとても悲しいことです。そして自由を奪われて狭い場所に押し込められてしまったら。そのような場所が、この牢でした。このように不当な扱いを受けた時、人は怒りを持ちます。落胆します。失望して力を失います。不当な逮捕とまではいかなくても、同じようなことは、私たちの周りにも時々あることです。

逃げ出したい、どうやったら逃げだせるのか？私ならまずそのように考えるでしょう。しかしパウロとシラスは、その時もいつもと変わらないことを始めました。真夜中の牢の中で、祈り、賛美の歌を歌いはじめたのです。パウロは、次のように語っています。

> いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。
>
> （1テサロニケ　5・16〜18）

パウロにとって、祈りと賛美のために、場所と時間を選ぶ必要はありませんでした。どこにいても、どのよう

な状況であっても、彼の心はすぐに主の大庭に飛んでいくことができました。この牢での賛美はその夜、奇蹟を起こしました。パウロたちの、この力の源はどこから来ているのでしょうか？牢の賛美で思いだす第2次大戦中の実話があります。

アーネスト・ゴードンという人が書いた「クワイ河収容所」（ちくま学芸文庫）という本に出会ったのは、まだ学生の頃でしたが、大きな勇気をもらいました。クワイ河マーチでも有名なタイとミャンマーにあるタイメン鉄道建設には、多くの捕虜（ほりょ）がかかわりました。この本には、その収容所でのむごい出来事がくわしく描かれています。

タイメン鉄道の建設では、線路を引く労役で数万人の命が犠牲になったと言われます。捕虜はわずかな食料で厳しい労働を強いられました。捕虜の一人であった著者は、体を壊して「死者の家」と呼ばれる掘立小屋に捨てられました。自分では動くことができず、あとは死を待つだけの状況でした。すべての生きる希望を捨てかけたときに、一人の友人が見舞いに来て汚い体を拭いてくれ、食事を運んでくれるようになりました。その友人は神様に対して純粋な信仰をもっていました。このような献身的な介護で、著者は奇蹟的に助かり、徐々に回復しました。

相変わらず収容所では厳しい毎日が待っていましたが、収容所の中には、隣人を思いやるという働きが人々の中に広がっていきます。時には、自分のわずかな配給食料を困っている隣人に与える人の話や、他人の罪をかぶり、身代わりになぐり殺されてしまった敬虔な同胞の話が聞こえてきます。こうして著者は、このような収容所においても、神様は日々働かれ、自分たちにも、弱い人たち、傷ついた人たち、困っている隣人のために働く自由が残されていることに気づき始めるのでした。やがて竹藪集会という名前の、ジャングルの中の空き地での集まりで、賛美が始まり、イエス様のことを語る、祝福に満ちた集まりが毎晩もたれるようになりました。

著者は、収容所の中で「絶望することを拒否する」ことを学んだ、と言っています。それは、収容所という劣悪な環境をも、乳と蜜の流れるところに変えることのできる神様の奇蹟を経験したからにほかなりません。

ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。

（マタイ　18・20）

イエス・キリストのご臨在を知る時に、絶望を拒否する力が与えられ、賛美が生まれます。

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。

（ヘブル　13・5）

使徒の働き16章に戻りましょう。牢で賛美の歌を歌っていたパウロたちが経験した第一の奇蹟は、大地震が起こって牢の扉がすべてあいてしまったことです。けれどもパウロたちも他の囚人たちも、すぐには逃げ出さなかったのです。主がここで何をなされるか見てみようとしていたのかもしれません。パウロたちは、牢の中でも



主が確かな計画を持っていることを確信していたのです。

そこに看守がやってきました。看守は、扉があいているのを見て、囚人がみな逃げてしまったものと思い、責任を感じて自殺を図ろうとしました。それを見たパウロは「自害してはいけない。私たちはみなここにいる。」と叫びます。それを聞いた看守は、二人を外に出してから、「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。」と聞きます。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

こう告げられた看守は、二人を自宅に連れて行きます。看守の一家の回心が、パウロたちの経験した第二の奇蹟です。これも牢での賛美から生まれたものです。

おそらく看守は、上官を恐れていましたから、責任を全うして自殺をしようとしました。自分の仕事に忠実な人でした。しかし、パウロたちに出会った晩、本当に恐れるべき方は誰なのかを知ったのです。その時、絶望は希望に変わりました。そしてその恵みは家族にも与えられました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ　29・11）

最近ある金融機関に勤める若者の話を聞きました。いい就職をしたものの、ノルマを達成できず、また何度か失敗をして上司になじられ、鉄道の踏切で自ら命を絶った、という悲しいニュースでした。多くの若者が力を失っています。今の社会の、出口がなかなか見えない状況が、若者世代の希望を奪っています。しかし、絶望する必要はありません。もし牢のような場所にいたとしても、小さな賛美が奇蹟と慰めと救いをもたらします。小さな賛美から始めましょう。

どんなにさびしいときにも、
どんなにかなしいときにも、
イエス様がいちばん、
イエス様がいちばん
たとえそれが、どんな場合でも
イエス様がいちばん、
イエス様がいちばん

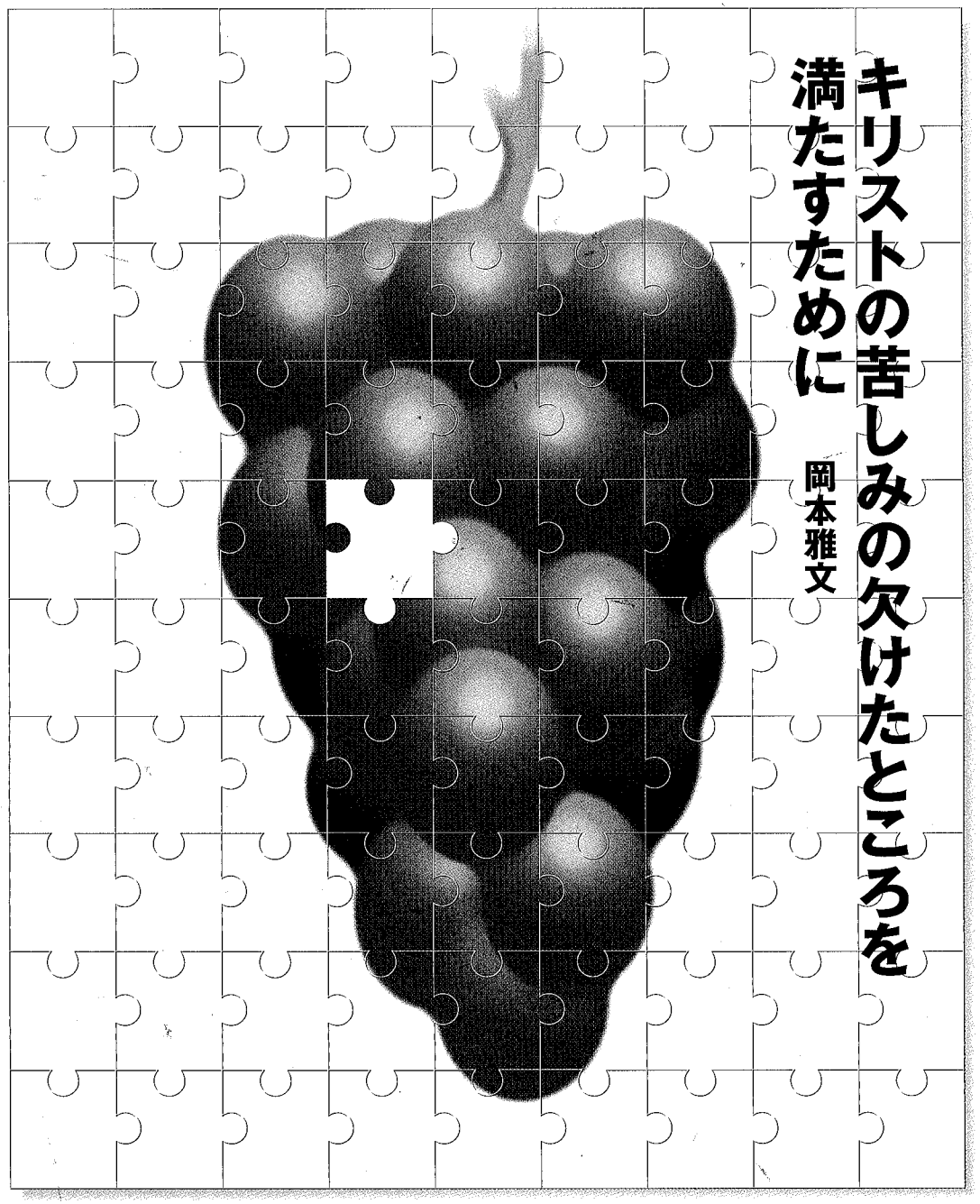
だってイエス様はかみさまだもの
だってイエス様はかみさまだもの
（14歳の夏、救われた日に買い求めた賛美集より）



富岡　徹郎
桐朋高校、国際基督教大学卒、日本ヒューレット・パッカード社勤務

キリストの苦しみの欠けたところを満たすために

岡本雅文



聖書の中心問題

私がキリスト集会に導かれた日、「聖書の中心問題は十字架のキリストの死です。」と、一人の男性信者は言われました。そのことばどおり、その後の四半世紀は、「十字架につけられた方とはどのような方であるのか」という問いを尋ね求める旅でした。そして、その中で出会ったのは、十字架につけられた方の苦しみの深さと、その深さ故の主の愛の高さ、広さです。これから味わうみことばが、釘のように私たちを主イエス様と共に十字架に打ち込んでくださいますように。

知恵ある者のことばは突き棒のようなもの、編集されたものはよく打ちつけられた釘のようなものである。これらはひとりの羊飼いによって与えられた。（伝道者の書　12・11）

キリストの苦しみの欠けたところ

ですから、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。そして、キリストのからだのために、私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。キリストのからだとは、教会のことです。

（コロサイ　1・24）

「キリストの苦しみの欠けたところ」があるとすれば、キリストの苦しみ（死）は完全ではなかったのでしょうか。もちろん、否であります。なぜなら、「イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、『完了した。』と言われた。そして、頭をたれて、霊をお渡しになった。」（ヨハネ　19・30）と書かれているからです。

もしそうであるならば、「キリストの苦しみの欠けたところ」とは、何を意味するのでしょうか。

主の苦しみと主の愛

私たちが苦しむ時、悩む時、失望・落胆する時、その時こそ主イエス様と出会う時です。イエス様と深い交わりが与えられる機会です。もし、このようなことが起こされなかったなら、キリスト（主イエス様）の苦しみのひとかけらさえも知ることがなかったでしょう。

私たちが主にあって悩み苦しむ時に初めて、極みまで深く苦しみ抜かれた主の苦しみに、触れるようになります。なぜならば、私たち自身の小さな苦しみでさえ、我身を焼き尽くさんばかりに悩みの淵に投げ込まれるのに、主イエス様が苦しまれた苦しみは、はるかに深いからです。ご自身のことはいっさい考えないで、人のため

にあざけられ、むち打たれ、いのちまでも差し出してくださったからです。

私たちは、悩みや苦しみを通して、主イエス様であるぶどうの木にしっかりと接ぎ木されるようになります。ただぶらさがっているだけではなく、十字架につけられた方の傷口に接ぎ木されるのです。あの日、よみがえられたイエス様が、「傷口に手を差し入れなさい。」とトマスに促されたように、今日私たちも招かれています。

それからトマスに言われた。「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」
（ヨハネ　20・27、28）

こうしてトマスは、霊的な意味でまことのぶどうの木であるキリストの苦しみにつなぎ合わされました。そして時が来て、ぶどうの木の幹から枝に養分が注ぎこまれた時、すなわち御霊が注がれた時、トマスは別人のように変えられて、この方を証しする者となりました。

そのようなわけで私たちに与えられる悩み苦しみは、主の十字架の釘跡に指を、主のわき腹の傷跡に手を差し入れるようなものではないでしょうか。ですから、私たち自身が悩み苦しむ時、主イエス様が苦しみを通して全うされた主の愛の中に、とどまるようになります。そして、十字架につけられたイエス様のみからだから流れ出る血と水と御霊で満たされるようになるのです。

しかし、パウロを通して告げられている事実は、キリストの苦しみがもたらすはずの主の愛が、私たちのうちに満たされていない。からだなる教会のうちに満たされていない。すなわち「欠けている。」ということではないでしょうか。私はこのみことばの前に、深くこうべを垂れざるを得ません。

私たちが悩みと苦しみの中で、恐れと望みと感謝を持って、十字架につけられた方の苦しみの深さゆえのご愛に触れるなら、御霊が私たちのうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出るようになります。そして、私たちを広い所に導いてくださいます。

「わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。」
（ヨハネ　12・26）

兄弟のためにいのちを捨てる

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。（1ヨハネ　3・16）

これこそヨハネの告白です。彼の生きた証しです。御霊によって導かれる「主がおられる所」とは、「兄弟（姉妹）のために、いのちを捨てる。」ことが喜びそのものとなる所です。（注：当時の初代教会では、信仰を共にする男性を兄弟、女性を姉妹と呼び合っていました。キリスト集会でも同じ呼び方をしています。）

それでは、「兄弟のために、いのちを捨てる。」とは、どのようなことでしょう。十字架につけられた方と同じように、今度は私たちが兄弟姉妹に代わって手に釘を、わき腹に槍を受けるということでしょうか。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎むものはそれを保って永遠のいのちに至るのです。」
（ヨハネ　12・24、25）

みことばに耳を傾けると、「兄弟のためにいのちを捨てる」とは「自分のいのちを憎む」と聞こえてきます。すなわち、「自分のたましいを喜ばすことから離れる」ということでしょう。

キリストの苦しみの欠けたところを満たすために

なぜなら、私たちが一つのからだとなるために、主イエス様は死をもって完了してくださったからです。主イエス様こそ、小さな事に忠実なお方です。ちりにも等しい私たちを、ご自身の瞳のように大切に取り扱ってくださいました。この主イエス様のみこころを実行したいと、心から願い求める時に、弱い私たちのために、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、とりなしてくださいます。この事実に目を留め続けるならば、御霊（助け主）が深くかかわって、支えてくださる恵みに預かるようになります。

ですから、「互いに愛し合いなさい。」という聖書全体の命令は、「互いに自分のいのちを憎み合いなさい。」ということではないでしょうか。兄弟姉妹のために苦しむことは、主ご自身にお仕えすることです。このように、主の喜びを共に喜ぶ仕事が私たちの前に備えられています。

あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。（マタイ　25・40）

主の喜びを共に喜ぶ仕事とは、このみことば（みこころ）を実行することが、生きがいとなる人生ではないでしょうか。このように小さな事に忠実な者が、主イエス様に喜んでいただけるのではないでしょうか。

イエス様が命を捨ててくださったほどのあの兄弟、あの姉妹のために「いのちを捨てる喜び、自分のいのちを憎む喜び、自分のたましいを喜ばせることから離れる喜び」が与えられますように。

キリストの苦しみの欠けたところを満たすために

こういうわけで、あらゆる悩み、苦しみは、主に近づくための恵みそのものです。ですから「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。・・主は近いのです。」（ピリピ4・4、5）とパウロは手紙に書いたのではないでしょうか。

ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。

（1ペテロ　2・23）

この十字架につけられた方こそ、喜ぶことができる根拠です。この方の御翼の陰に隠れるようにして、主なる神のジグソーパズルは完成していくのではないでしょうか。兄弟姉妹が、キリストをかしらとする一つのからだに組み込まれなければ、キリストの苦しみはいまだに欠けたままとなっています。パウロの生涯の仕事は、「兄弟姉妹のために苦しみを受ける。」というものでした。すなわち、自分のいのちを憎むことであり、いのちを捨てることでした。

そして、この主のみこころをしっかりと握って離さなかったパウロの生涯が、「どのように栄光に富んだもの」（エペソ　1・18）であったかを、私たちは知っています。

ジグソーパズルの欠けた一枚のピースは、百匹の羊の中で迷子になった一匹の羊です。失われたこの一枚のピースが、私自身であったと悔い改めることができるならば幸いです。

キリストの苦しみの欠けたところで、十字架につけられた方が両手を広げて待っておられます。ここに、キリストの苦しみがもたらす深い神の愛と慰めがあります。失われた一枚のピースが組み込まれる所です。

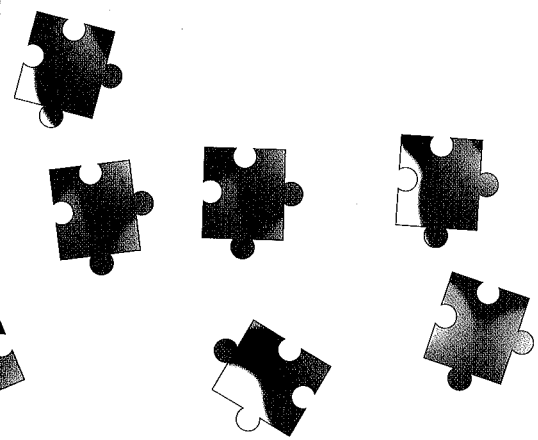
みことばが、信仰によって、結びつけられるのと同様に、私たちも、同じ一つのからだに結び合わされる恵みに満たされますように。

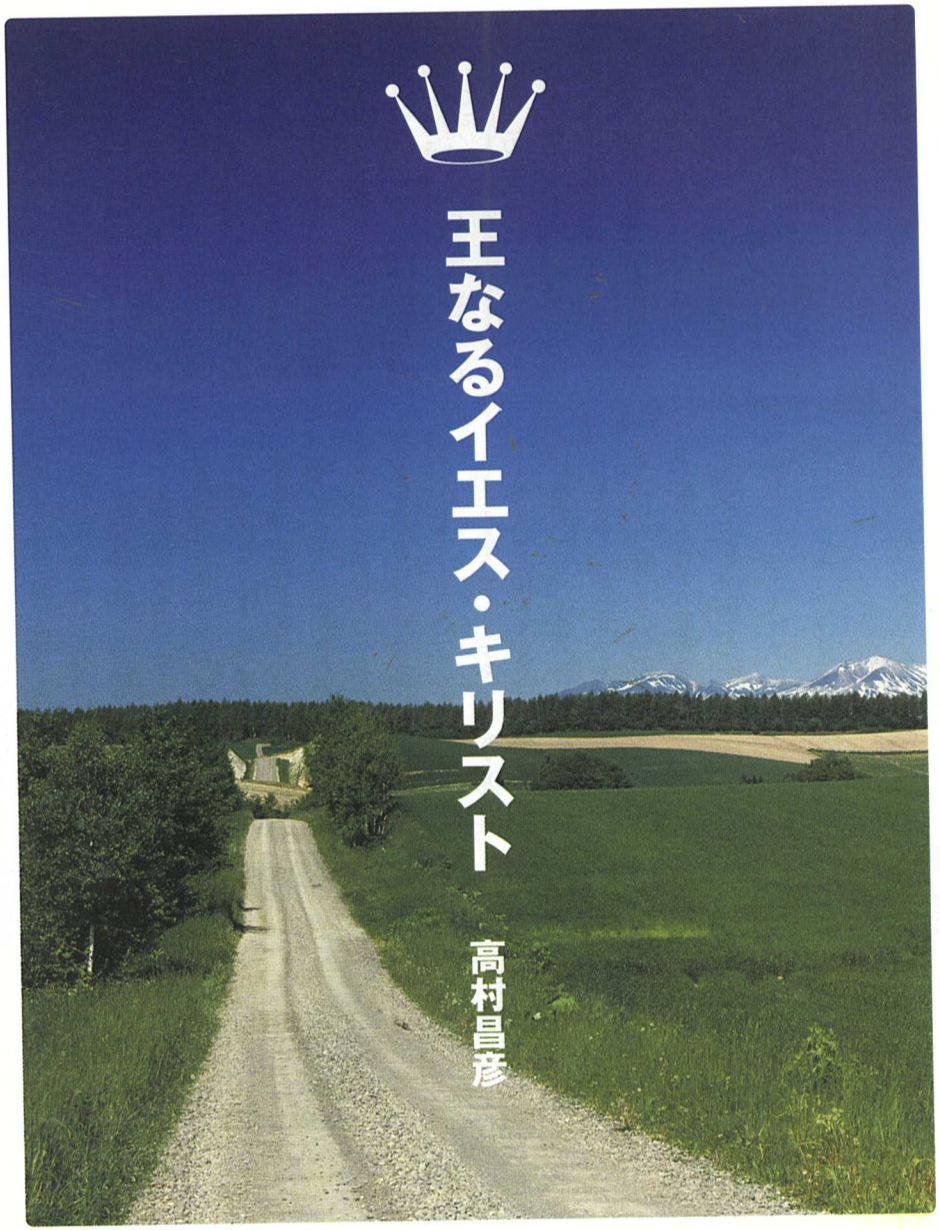
見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

（詩篇　133・1、3）



岡本雅文
栗田工業（株）技術主幹。広島県呉三津田高校、山口大学工学部卒。1951年生まれ。広島県出身。





見よ。ひとりの王が正義によって治め、首長たちは公義によってつかさどる。彼らはみな、風を避ける避け所、あらしを避ける隠れ場のようになり、砂漠にある水の流れ、かわききった地にある大きな岩の陰のようになる。

（イザヤ　32・1、2）

預言とは、将来のことを予言することではなく、神様の御心を人々に告げ知らせることであります。したがって、預言者とは神様の御心（それはその時点のことがらだけではなく、将来の神様のご計画をも含みます）を告げ知らせるために、神様に選ばれ、立てられた人のことです。預言には不信仰の指摘があり、悔い改めの促しがあり、愛と恵みの救いがあり、そして何よりも救い主の来臨を告げるものでありました。

イザヤは、紀元前8世紀に南ユダ王国で活動した預言者でした。イスラエル人は、神様に選ばれた神の民であり、神様に信じ従い、礼拝をささげることが本来のあり方でありました。しかし、イザヤが預言者として活動していた当時、南ユダ王国は古くからの大国エジプトと、新興の強国アッシリヤの間に位置し、王も民も不安な状態にあり、彼らが論じていたのは、どのような防衛策を立てれば安全を確保できるかということばかりでした。神様に祈り、そのみことばに聞き従おうとする態度はまったく見られませんでした。そして、多くの論議の末、王と国の指導者たちが下した結論は、エジプトと同盟を結び、これに頼るということでした。それは、神様をないがしろにする国アッシリヤの圧迫に対して、偶像を拝むエジプトと同盟を結ぶということであります。神様によって建てられた国が神様に頼ることを放棄したということであります。イザヤは、その不信仰に基づく決定を厳しく指弾しました。

ああ。助けを求めてエジプトに下る者たち。彼らは馬にたより、多数の戦車と、非常に強い騎兵隊とに拠り頼み、イスラエルの聖なる方に目を向けず、主を求めない。

（イザヤ　31・1）

時の権力者に対して、臆することなくその誤りを伝える、それは破れ口に立つ人の姿です。破れ口に立つ人は、人を恐れず、かえって口をつぐむことを恐れます。破れ口に立つ人は、時を選ばず神様のさばきと救いを語ります。いつの時代にも神様が求めておられるのは、この破れ口に

立つ人です。神様のことばを無視し、神様の御心を軽んじるものに対して、悔い改めて神様の救いを得るように伝える人を、主は今日も求めておられます。破れ口に立つ人は、預言者の時代だけの人ではないのです。

わたしがこの国を滅ぼさないように、わたしは、この国のために、わたしの前で石垣を築き、破れ口を修理する者を彼らの間に捜し求めたが、見つからなかった。
（エゼキエル　22・30）

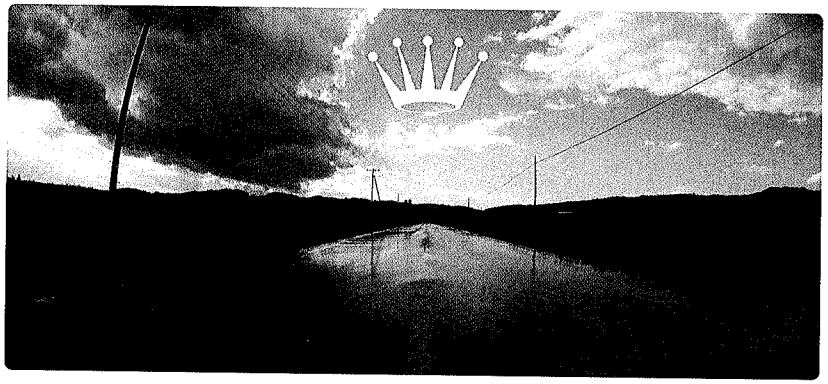
イスラエル民族が弱体化し、衰退した真の原因は、主を畏れず人を恐れ、主に頼まず人に頼む、すなわち、主を信頼しないことにありました。そして今度も、南ユダの国王は、その不信仰を悔い改めないばかりか、偶像の国エジプトに助けを求めたのです。それはますます罪を重ねることであり、国はいよいよ弱体化し、滅亡に向かう一方であるとイザヤは鋭く指摘しました。

悔い改めてこそ罪の赦しがあり、罪の赦しがあってこそたましいは生き返る、それが聖書の教えです。逆にいえば、たましいが生き返るためには、悔い改める以外にないのです。預言者は次のようにいっています。

彼は反省して、自分のすべてのそむきの罪を悔い改めたのだから、彼は必ず生き、死ぬことはない。
（エゼキエル　18・28）

悔い改めて赦されないことはありません。王と民がイザヤを通して語られた預言のことばを聞いて悔い改めるなら、神様はそむきの罪を赦してくださり、国は生き返ることができるのです。しかし、悔い改めの機会を捨てた南ユダ王国は、紀元前五八七年に新しく起こったバビロン帝国に壊滅されました。悔い改めの重要さは、南ユダ王国に限ったことではありません。時が移り、ところが変わっても同じです。悔い改めのすすめをひとごとのように聞く者に対して、主は次のように警告しておられます。

あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。（黙示録　2・4、5）



南ユダ国王に失望したイザヤに対して、神様はひとりの王の到来を啓示されました。それが冒頭に書かれている王です。以下、イザヤが受けた啓示の中身を見たいと思います。

第一にその人物は、「風を避ける避け所、あらしを避ける隠れ場」のような存在とあります。

「風を避ける避け所、あらしを避ける隠れ場」とは、すさまじい嵐に遭遇して、恐怖の中で立ち往生している人と荒れ狂う暴風との間に立ちはだかる人物のことです。この人物は、吹きすさぶあらしの中で盾となり、とりでとなります。

人生にはあらしに直面して、身を隠す場所もないと感じる時があります。思わぬ災害を受けて立ち往生することがあり、予期せぬ宣告を受けて恐怖に駆られることがあります。その時、人はそれまでの信念が役に立たず、自信も喪失し、恐れの中で立ち往生するのではないでしょうか。そのようなときに、この人物は、私たちとその困難な事態との間に立ちはだかります。その上で、私たちを隠れ場に導き、あらしから守りとおしてくれるのです。

あなたは私の隠れ場。あなたは苦しみから私を守り、救いの歓声で、私を取り囲まれます。
（詩篇　32・7）

第二にその人物は、「砂漠にある水の流れ」のような存在であります。日照りで水が失われた地では、すべてが干上がり、すべての命が失われます。このように何一つ生えるもののない死の荒野を潤す川となって、荒れ果てた地を緑豊かな地に変える力をもつ人物のことです。

人生には長く続く苦痛があり、また愛するものを失って生きる力が奪われ、心が干からびたようになることがあります。その時、この人物は「砂漠にある水の流れ」となって、干からびた心に豊かな命の水を注ぎ、潤し、生きる望みと喜びを与えます。その水はそれだけでとどまらず、さらに同じような悩みにある人、苦しんでいる人へと流れわたって、すべての人を潤すことができる力があります。

荒野と砂漠は楽しみ、荒地は喜び、サフランのように花を咲かせる。
（イザヤ　35・1）

わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。（ヨハネ　7・38）

第三にその人物は、「かわききった地にある大きな岩の陰」のような存在です。

世の中には解決がつかない問題を抱え込んで、悩み、疲れきって、希望を見出せないでいるたくさんの人がいます。その人の人生は、容赦なく照りつける灼熱の太陽によってくたびれ果て、死ぬほど渇く毎日でありましょう。そのような人に大きな岩陰となって、疲れと苦しみをいやすことのできる人物のことです。

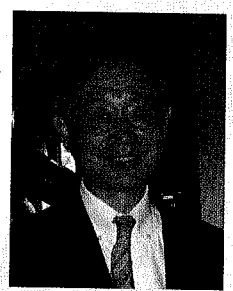
この人物は、八方手を尽くしても解決できない問題で悩み、苦しみ、疲れ果て、希望を見出せないでいる人の岩陰になります。苦しむ人はこの岩陰で休みを得て、息を吹き返し、新しい力を得ることができます。息を吹き返したその人は、新しく生まれ変わった人のように希望と喜びをもって、再び人生の旅を続けることができるようになります。

昼は暑さを避ける陰となり、あらしと雨を防ぐ避け所と隠れ家になるからだ。（イザヤ　4・6）

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。
（2コリント　5・17）

以上みてきたような人物に当てはまる方を、私たちはどこに見ることができるでしょうか。人間の中に探しても、見つけることはできそうにもありません。しかし、当てはまる方がただ一人おられます。それは、神様がイザヤに啓示された王、救い主として来臨された神の御子イエス・キリストです。イエス様は、イザヤが預言したように人生のあらしに悩む人のとりでとなって荒れ狂うあらしから守ってくださいます。また、生きる望みがなく、干からびてしまった心を潤す川の流れとなって下さるのはイエス様です。イエス様は、いつまでも解決がつかない問題で疲れ果てている人の岩陰となって休みを与え、新たに希望をもって人生を歩む力を与えてくださいます。

このような愛と恵みの方であることの王、理想の王イエス・キリストを仰ぎ、望みと喜びをもって人生を歩むことほど幸せなことはないのではないでしょうか。



高村昌彦
早稲田大学卒。日本アイ・ビー・エム退社（二〇〇二年）。長崎県出身



王なるイエス・キリスト

主の祝福を祈願して

キリスト集会新会堂の起工式

2010年9月上旬の完成をめざして、キリスト集会新会堂の起工式が1月11日、吉祥寺集会所で行われました。

式には設計を担当した環境建築設計事務所から宮坂正寛社長ら3人、工事を受け持つ京王建設から芝辻義治社長ら8人、それにキリスト集会から約200人が出席。お祈りと賛美の合唱に続いて、ゴットホルド・ベック宣教師、宮坂社長、芝辻社長から、それぞれ次のようなお話がありました。

「きょう起工式をするのは、今まで導いてくださった神に感謝するため。今からも全能なる神の助けを必要とすることを知っているため。そして、主なる神にのみ、拠(よ)り頼む者であることを、新たに確認するためです。」(ベック宣教師)、「新会堂は簡素で、かつ優しく人々を迎えてくれるような建物に、というコンセプトで設計しました。」(宮坂社長)、「近隣の方々に迷惑をかけないよう細心の注意を持って工事を進めます。9月には、みなさまにご満足いただける高い品質の建物をお引き渡しする所存です。」(芝辻社長)



お話の前後には、バイオリン演奏と独唱もあり、厳粛な空気の中、新会堂建設を通して主のご栄光が現わされるよう、真剣な祈りが捧げられました。

新会堂は鉄筋コンクリート2階建て、延べ床面積117.77坪。吉祥寺集会所を残して南隣りの敷地に建設し、1、2階に集会所が備えられます。

北米よろこびの巡回

「イエス様を中心にした交流の機会が少ない在米の方々と、喜びを分かち合いたい」こんな思いで、吉祥寺キリスト集会の3組のご夫妻が9月1日から6日間、北米を訪れ、オクラホマ州ノーマンとコロラド州デンバーで家庭集会を持ちました。岩崎洋二さん、直美さん、柿沼義一さん、晃子さん、藤田匡さん、信子さんの6人です。米国の集会からもノーマンではリーディ三津乃さんと中島信行さん、デンバーではグラハム喜代子さんとレイマー美詠子さんが加わり、二つの家庭集会には、それぞれ十数人の日本人が集いました。福音を聞くのは初めて、という方も何人か来られました。

そして、賛美と祈り、聖書のメッセージ、一人ひとりの短いお話、主にある交わりなどに、満たされた時を持つことができました。北米を巡回した6人は帰国後、「今回の出会いをきっかけに、テキサス州ダラスに、主を中心にした交わりが起こされました」との知らせを受け、人間の計画をはるかに超えた主イエス様の御働きを賛美し、感謝しました。

末期の床で綴った愛息への手紙

2009年11月22日、42歳で召天した芦屋キリスト集会の佐藤精さん。末期の病床では、よく見舞い客と共に賛美し、「イエス様を知った喜び」を語っていましたが、一人の時には親族への遺言を書き綴っていました。携帯電話のメモ帳に記されていたのです。

「全部書くのに1ヶ月はかかったと思います。モルヒネでもうろうとしていた時もありますので」と妻の汀さん。遺書は家族全員のほか、義父母、母、姉らに宛てて、ていねいに書かれていました。その中から、小学4年生の長男、心(こころ)君への手紙を紹介しましょう。

愛する心へ。

お父さんの子供に生まれてくれてありがとう。

でも、これはあなたが自分で選んだんじゃなく、イエス様のみこころだったんだよ。

僕ばかり怒られていやだ、と思うことが多分、いっぱいあったと思う。

お父さんやお母さんは、心が初めての子供で、どうしたらいいんだろうって悩んでばかりでした。そのたびに泣きながらイエス様にお祈りしていたんだよ。

それから、もっとみんなで山や川や海に遊びに行きたかったな。

心たちが大きくなるまでお父さん待てなかったね。ごめんね。

これから先、いろんな困難があると思うけど、全部イエス様とお母さんに相談すればいいよ。少しの間寂しいけど、必ず天国で会えるというのはイエス様が約束してくれたことだから、期待して待っててね。

それまでお母さん、たたえ、おじいさま、ばあばちゃのこと、しっかり守ってね。

お父さんより。





聖書は何と言っていますか

―あなたはなぜ信じないのですか？　十四の質問に答える（上）―

ゴットホルド・ベック

第5回

天地のすべてをお造りになった神は、人間を、ご自身の意思に無条件に従う者、ロボットとしてではなく、自発的に神を愛し、神に従う者としてお造りになりました。しかし、人は主なる神のみこころとは反対に、神にそむく道を選び、罪の奴隷となってしまいました。このため神は、愛するひとり子であるイエス様を十字架につけ、その血によって罪を赦すという、考えられないような方法で罪の問題を解決してくださいました。このことを信じてイエス様を主とする者は、一人残らず神の子とされるという約束をいただいています。だれでも、どんな状態にあっても、イエス様を信じるなら無条件で救われるのです。

イエス様は救いを無償で提供しておられます。救われるには努力、善行、修行など何ひとつ必要ありません。ただイエス様を救い主として信じるだけでよいのです。これほど単純で簡単なことはありません。しかし、それにもかかわらず、救いの恵みを受けることをためらう人がいます。そして、その人たちはそれぞれに信じることのできない理由があると言います。それは本当に信じることの障害となるようなものでしょうか。その理由としてよくあげられる十四の例について、考えてみましょう。

1 「自分は救いに値しない?」

人は、子どものときから言いわけを言い、責任を逃れようとする性質を持っています。生まれたままの人間はだれでも、自分を罪人だと認めたくないものです。ですから、自分を罪人だと認めている人は、すでに聖霊の働きのもとにあります。

事実、私たちは例外なく罪人です。しかし、私たちを愛してくださっている主は、私たち罪人のために死んでくださいました。病人が医者を必要とするように、罪人が必要とするのはただ主です。

私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。（ローマ 5・6）

私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。（ローマ 5・8）

イエスは答えて言われた。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」（ルカ 5・31、32）

「人の子（イエス様）は、失われた人を捜して救うために来たのです。」（ルカ 19・10）

主は罪人のために犠牲になってくださったのです。イエス様の血によってきよめられれば、どのような罪も赦され、永遠のいのちを受けます。また、イエス様は、イエス様のところに来る者を捨てるようなことは決してなさいません。今日も、主は次のように言っておられます。

「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」（イザヤ 1・18）

「父（主なる神）がわたし（イエス様）にお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」（ヨハネ 6・37）

神は、実に、そのひとり子（イエス様）をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ 3・16）

パウロは次のように証ししました。

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。（1テモテ 1・15）

ここではパウロは、「私は罪人のかしらです」と言っています。しかしそれだけでなく、彼は続けて「私があわれみを受けたのは、…（1テモテ 1・16）」と言っています。人が救われるのは主が憐れんでくださるからです。主は、罪人である全人類のために死んでくださいました。実際、主の憐れみがなければ、自分を罪人と認めざるをえない多くの人には、絶望以外に道はないでしょう。

たとえば、この世では自分がしたいことをするために、あるいは自分の考えで、胎児を中絶によって死なせることが頻繁に行なわれています。その経験








いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。

（詩篇　103・9～12）

主は罪を赦すだけではなく、罪を忘れてくださるのです。全能なるお方があえて忘れてくださるのです。「義と認める」とはそういうことであり、想像もできない恵みです。事実、すべての罪は、意識していようがいまいが、主の血のゆえに赦されます。

もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

（1ヨハネ　1・7）

「わたし（主なる神）は、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖ったからだ。」

（イザヤ　44・22）

へりくだる者は必ず受け入れられます。永久に受け入れられます。たとえあなたが、自分を大きな罪を持つ人の多くは、結果として自分は人殺しをしたと認めざるをえなくなります。こうして自分の罪の大きさを知ると、人はだれでも絶望に襲われるのではないでしょうか。同じように、自分の欲望に負けて部下を殺した体験を持つダビデは証ししています。

神よ。私の救いの神よ。血の罪から私を救い出してください。そうすれば、私の舌は、あなたの義を、高らかに歌うでしょう。

（詩篇　51・14）

私は、自分の罪を、あなた（主なる神）に知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。

（詩篇　32・5）

ダビデは祈りを通して、「赦された」という確信を持ちました。主がどのように赦してくださるかは、次のみことばが示しています。

主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。天が地上はるかに高






人だと考えていても、また自分のような者には救いの希望はないと思っていても、あなたの判断は救いの恵みの前には何の意味もありません。主なる神の前に罪のない者は一人としていないのですから、ただイエス様の前にへりくだるか、それとも自分を良しとするか、それだけが問われるのです。へりくだれば主は必ず恵んでくださいます。イエス様がお語りになった、放蕩息子の話を見てみましょう。

またこう話された。「ある人に息子がふたりあった。弟が父に、『おとうさん。私に財産の分け前を下さい。』と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。何もかも使い果たしたあとで、その国に大ききんが起こり、彼は食べるものにも困り始めた。それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって、豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。

しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。立って、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん、私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。」』

こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父　親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。

息子は言った。『おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。』ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。

この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』そして彼らは祝宴を始めた。」

（ルカ　15・11～24）



この息子は父から財産を受け取り、自分のやりたいことをするために父を捨てて旅に出ました。それ以来、父は、息子を失った状態にあったのです。しかし、悔い改めて帰ってきたとき、彼は父の腕の中に抱かれました。この父の心は、私たちに対するイエス様ご自身のみこころを現わしています。イエス様は、私たちが主なる神の前に悔い改めて立ち返ることを望んでいてくださいます。

2 「自分を変えなければ救われない？」

私のような者がそのままで救われるはずがない、だから救われるには努力して自分を変えなければならない、と考える人がいます。しかし、イエス様のみことばはそれとは全く異なります。イエス様は、自分は正しいと思っている人のためにではなく、罪人のために、十字架にかかって犠牲となってくださいました。主ははっきりと仰せになっています。

イエスは答えて言われた。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」（ルカ　5・31、32）

イエス様の前に出るにはまず自分を変えなければならないと考える人は、罪が何であるかを知らない人々です。自分の努力で罪をきよめることはできません。そのような努力は全くむなしいのです。

たとい、あなたがソーダで身を洗い、たくさんの灰汁を使っても、あなたの咎は、わたしの前では汚れている。―神である主の御告げ。―（エレミヤ　2・22）

クシュ人がその皮膚を、ひょうがその斑点を、変えることができようか。もしできたら、悪に慣れたあなたがたでも、善を行なうことができるだろう。（エレミヤ　13・23）

すでにあげたルカの福音書15章の放蕩息子は、自分の父親のところへ行く前に、自分をよく見せようなどとは考えもしませんでした。彼はぼろぼろになって父の前に出ました。「私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません」。帰ってきた息子を父は腕に抱きしめました。神様が大事になさることは、人間がこのようなへりくだりの心を持つかどうかです。別の箇所にはこうあります。

自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』

ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』

あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」（ルカ　18・9～14）

パリサイ人とは、自分で自分をよしとする者であり、律法を守っていることを神の前に誇りを持って主張できると考える人々です。しかし、取税人は自分の真の姿を正直に認め、ありのままで自分を主におまかせしました。だから、主なる神に義と認められたのです。大切なことは主の前に「へりくだること」です。

3 「悪い道から離れられない？」

「私は悪い道にあまりにも深く入り込んでいるので、そこから離れることができない」と考える人がいます。この考えには二つの意味があります。一つは「私は悪い道から離れられないから、救われない」という思いこみであり、もう一つは「救われるかどうかにかかわらず、私は悪い道から離れられない」という考えです。

まず初めの例について考えてみますと、イエス様の救いを受けるまでは、人は例外なく罪のうちに死んでいるということを知る必要があります。死んでいるとは霊的に死んでいるのですが、死んでいるということに程度の差はありません。この、霊的に死んでいる罪人を救うためにイエス様は来てくださったのです。主は過去がどうだったか、あるいは現実がどうかを問うことはなさいません。問題は








いつも、私たちが正直にイエス様の前に出るかどうか、から始まります。言いかえるなら、だれでも回心によっていのちを受けるか、救いを拒否して滅びに至るか、選択は二つに一つしかないのです。

御子（イエス様）を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる。

（ヨハネ　3・36）

思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。

（ガラテヤ　6・7、8）

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

（ローマ　6・23）

次に、悪い道から離れられない、ということに関して言えば、やろうと思えば離れられます。もちろん、自分の力でそれをしようとしたらその結果は明らかです。惨めで、絶望しかないでしょう。しかし、主に頼ると、イエス様の力によってできるのです。あきらめる必要はありません。

私は、私を強くしてくださる方（イエス様）によって、どんなことでもできるのです。

（ピリピ　4・13）

イエス様は罪の力からの解放を約束してくださいました。だから、主に近づく者は罪から離れることができるのです。

「もし子（イエス様）があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」

（ヨハネ　8・36）

したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

（ヘブル　7・25）

悪い道から離れるには、ただ一つ、イエス様のもとに出て行き、イエス様に従うとことです。それ以外にはありません。主はすでに世と罪に勝利なさっています。イエス様の勝利にあずかる者となることができるのです。ですから恐れる必要はなく、また勝利を疑う必要はありません。次のみことばがそれを明らかにしています。

ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。

（ローマ　6・12〜14）

神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。

（1ヨハネ　5・4、5）






4　「救われるためには多くのものを捨てなければならない？」

救われるためには、また救われたあとも、多くのものを捨てなければならない、と恐れる人たちがいます。確かに、救われた人は多くのものを捨てることになるでしょうし、またそうする必要があるでしょう。しかし人は、すべてのものを持って死んでゆくことはできません。また、あなたの地位も名声も、それがいかに大きく長く尊敬をされるものでも、あなたを永遠の滅びから救い出すことはできません。ほんとうに大切なもの、必要なものは、「キリストにあるいのち」です。

この世のものから離れられない人々は、イエス様のいのちにあずかることはなく、また栄光の富を見ることもできません。すべてのものを失う滅びに向かうよりも、この世のものを捨て、ほんとうに大切なものを受ける道を選ぶべきではないでしょうか。

「人は、たとい全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありましょう。」（マルコ　8・36）

世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人の



うちに御父（主なる神）を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。

（1ヨハネ　2・15〜17）

モーセとパウロもまた、キリストのためにすべてのものを捨てて、あふれるばかりの祝福を受けました。彼らは、主なる神からすべてのものを受けたのです。

エジプトの王女の子として育てられたモーセについては、次のように書かれています。

信仰によって、モーセは成人したとき、パロ（エジプト王）の娘の子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。

（ヘブル　11・24〜26）

モーセはものごとを長い目で見ることができました。彼ははかない罪の楽しみではなく、キリストによって与えられる富を求めたのです。彼の決心の結果、二百万の人々が奴隷から解放されました。

最高の教育を受けた、エリートだったパウロは、イエス様をキリストと認めることを拒絶し、キリストを信じるものを迫害することこそ神のみこころだと考え、行動していました。しかし、キリストを知った時、それまで大切だと思っていたすべてのものがまったく無価値であるばかりか、キリストに近づくことを妨げていたものであることを知りました。

しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

（ピリピ　3・7、8）

ここでパウロは、「私の主であるキリスト」と言っています。言いかえるならパウロは、「自分はキリストのしもべだ」と言っているのです。この時代、しもべとは奴隷を意味しました。それは、主人の意のままに動くものです。そのように、イエス様と出会ったパウロには、イエス様がすべてとなったのです。

捨てることによって失うのではなく、主なる神は必要なものをすべて与えてくださいます。私たちは自分の欲やこの世の流れにしたがって、どうでもいいものやガラクタをなくてならないものだと思っています。それらばかりか、それらを手に入れるためにあくせくしています。

主なる神は天地とそこに存在するもの、また私たち人類の造り主です。ですから、私たちのことも、また私たちにほんとうに必要なものもよくご存知です。他方、なくてよいもの、持たなくていいものもご存知です。このお方に信頼する者には必要なものをすべて与えてくださいます。

まことに、神なる主は太陽です。盾です。主は恵みと栄光を授け、正しく歩く者たちに、良いものを拒まれません。万軍の主よ。なんと幸いなことでしょう。あなたに信頼するその人は。

（詩篇　84・11、12）

私たちすべてのために、ご自分の御子（イエス様）をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。

（ローマ　8・32）

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

主なる神は私たち一人ひとりを愛してくださいます。「今は恵みの時、今は救いの日」ですから、悔い改めるなら人はだれでも救われます。しかし、主なる神のことばに耳を傾け、そのみこころを受け入れない限り、救いを受けることはありえません。また、救いが提供されているうちに救われることが必要です。

「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。ところが、その門前にラザロという全身おできの貧乏人が寝ていて、金持ちの食卓から落ちる物で腹を満た







したいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおできをなめていた。さて、この貧乏人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。

彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』

アブラハムは言った。『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。それればかりでなく、私たちとおまえたちとの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることもできないのです。』

彼は言った。『父よ。ではお願いです。ラザロを私の父の家に送ってください。私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみの場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』

しかしアブラハムは言った。『彼らには、モーセと預言者があります。その言うことを聞くべきです。』

彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』

アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』」

（ルカ　16・19〜31）

5 「信仰を持つと友人を失う?」

孤独であることはつらいことです。ですから、人は友人を必要とします。しかし、友人はあなたといっしょに死の谷間までついていってくれるでしょうか、また、永遠の滅びからあなたを救うことができるでしょうか。世の友をどれだけ多く持っていても、彼らはあなたのいのちのためには何もすることはできません。イエス様は、「あなたがたを友と呼びました。（ヨハネ15・15）」とおっしゃいました。イエス様こそが、あなたの罪のためにご自分のいのちを捨てて十字架にかかり、最後まであなたとともに歩んでくださる本当の友なのです。大切なことは、友を失うかどうかではなく、真実の友を持つかどうかです。

幸いなことよ。悪者のはかりごとに歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、その人。まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。

（詩篇　1・1、2）

知恵のある者とともに歩む者は知恵を得る。愚かな者の友となる者は害を受ける。

（箴言　13・20）

貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友となりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。

（ヤコブ　4・4）

「また、わたし（イエス様）の名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。

（マタイ　19・29）

6 「あざけられることを恐れる?」

あざけられることはもちろん楽しいことではありません。しかし、永遠の滅びにおちいるよりは、あざけられるほうがはるかにいいではないでしょうか。まして、真理そのものである主を信じるがゆえにあざけられるのだとしたら、あざける者こそ愚かさをあらわしているのではないでしょうか。あざけられることを恐れたり、恥じたりする必要はありません。それどころか、あざけりを恐れることは主を恥ずかしく思うことを意味します。あざけられることを恐れ、また人を恐れる者は、自分からわなにかかります。しかし、主を恐れる者は、人間を恐れません。主を恐れることの報いは富と誉れといのちです。次のことばは勇気を与えてくれます。

人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。

（箴言　29・25）

「このような姦淫と罪の時代にあって、わたし（イエス様）とわたしのことばを恥じるような者なら、人の子（イエス様）も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。」

（マルコ　8・38）






謙遜と、主を恐れることの報いは、富と誉れといのちである。（箴言　22・4）

それにしても人は、なぜ恐れる必要のないものを恐れるのでしょうか。それは現実に捕らえられて、それ以外のものを見ることも想像することもできず、真理を見失ってしまうからです。たとえ人間がどれほど弱くても、頼るものがなくても、心の目が開かれて目に見えない真実を知ることができれば、恐れることはないでしょう。

すると彼（エリシャ）は、「恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多いのだから。」と言った。（2列王　6・16）

ダビデは次のように証ししています。

主は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。主は、私のいのちのとりで。だれを私はこわがろう。（詩篇　27・1）

主は生きておられます。ですから、主にゆだねれば心配は不要です。主は、良い牧者としてあなたを守り、本当に必要な導きを与えてくださるお方です。イエス様は私たちの身代わりになって十字架にかかってくださり、犠牲になってくださいました。このお方を考えると、だれでも安心してすべてをゆだねられるのではないでしょうか。ユダの王であったソロモンは世界一知恵のある人として知られています。そのソロモンは、「主を恐れることは知識の初めである（箴言1・7）」と言いました。人間を恐れるものは、知らないうちに人間の奴隷となっています。

結局のところ、人間は、人を恐れるか、主を恐れるかのどちらかだということです。天地を創造されたお方、永遠に存在されるお方、すべてのもの、歴史をも支配されるお方を恐れることこそが、やがて朽ち果てるものへの恐れから私たちを解放してくださるのです。

主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼（主なる神）に身を避ける者は。（詩篇　34・8）

「主の目は義人の上に注がれ、主の耳は彼らの祈りに傾けられる。しかし主の顔は、悪を行なう者に立ち向かう。」もし、あなたがたが善に熱心であるなら、だれがあなたがたに害を加えるでしょう。いや、たとい義のために苦しむことがあるにしても、それは幸いなことです。彼らの脅かしを恐れたり、それによって心を動揺させたりしてはいけません。（1ペテロ　3・12〜14）

彼（御使い）は大声で言った。「神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」（黙示録　14・7）



from Yokohama
各地の集会から

こちら横浜集会で〜す



私たちの横浜集会は二十二年前の一九八八年三月二十七日、公共施設（保土ヶ谷の地区センター）を借りて礼拝と福音集会を開いたのが始まりです。それ以前にも家庭集会は行っていましたが、日曜の礼拝には吉祥寺集会所まで通っていました。五家族ほどの小さな群れでのスタートでしたが、主は着実に集う人数を増やしてくださいました。

しかし、すべてが順調に経過したわけではありません。二、三十人になった頃、定期的に施設を借りることができなくなって、日曜礼拝は不定期とならざるを得ませんでした。その後、施設側から、礼拝などに使うのはお断りする、との通告も受けました。それでも、次の場所として幼稚園が与えられ、礼拝が途切れるということはありませんでした。幼稚園での集いは数年続きました。幼稚園児の小さな椅子に皆が小さくなって座り、おさなごのようになって語り合ったことは、今では楽しい思い出となっています。

その後、再び移転することになって、東急東横線の白楽駅近くの貸しホールを使うようになりました。移るたびに人数は増えて、つねに八十人以上が集うようになりました。そして十四年前、相模原方面から来られていた方々が別れて、相模原キリスト集会を起こされました。

主は二つになった集会にそれぞれ新しい魂を導き、信仰の友を増し加えてくださいました。そして、貸しホールが手狭になってきたとき、現在の横浜集会所（トークスビル三、四階）が与えられました。相鉄線二俣川駅前の便利な場所です。毎週日曜日には九十人ほどが集い、礼拝と福音集会、その後に軽食を共にしながらの交流の時を持ちます。抱えている問題や主の恵みなどを率直に語り合い、悩みや喜びを分かち合う場です。このほか、礼拝の前には中高生会を、また福音集会と並行して子供集会を別室で開いています。

日曜日以外には、火曜日に集って吉祥寺集会所の「学び会」をインターネットで傍聴し、小さな祈り会を持っています。水曜日は昼に地域の婦人たちの祈り会、夜に横浜集会の祈り会があります。また、二〜三か月ごとにベックさんを迎えての家庭集会を午後と夜に行っているほか、不定期ですが、家庭集会形式で福音集会と交流会を開いています。

神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。

（使徒　2・47）

このような集会になれればと祈っています。（山田　健）

「それゆえ、人はその父と母を離れ、
妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。」
この奥義は偉大です。
私は、キリストと教会とをさして言っているのです。
それはそうとして、あなたがたも、
おのおの自分の妻を自分と同様に愛しなさい。
妻もまた自分の夫を敬いなさい。（エペソ 5・31〜33）

結婚式と葬儀のご報告

Wedding 結婚式



9/23
大澤 宣明・朝陽



9/12 加藤 和彦・実穂



8/15
那須 昭彦・麻子



11/14
稲益 実・真希子



9/22 瀬戸口 泰博・真理



8/22
大庭 俊佑・美登里



12/23 吉田 信夫・恵



5/16
高栗 淳・
佳那子



5/5 山田 正志・知子



7/25 村上 弦・悦子



5/16 福元 修・涼子



7/12
原 正大・加奈恵



5/20 山城 玲子
5/25 原 セツ
5/26 石橋 こと
7/14 前田 滿
7/19 伊藤 ひさえ
7/23 元永 昭七
7/29 河口 稔
9/8 檜垣 烈
10/08 馬庭 義彦
10/27 門垣 かとこ
10/30 田中 さづ子

11/04 上野 和子
11/09 原木 敏雄
11/17 斎藤 祐治
11/18 三ツ野 頼子
11/24 佐藤 精
12/1 小松川 菊江
12/15 牧野 正俊
12/21 大窪 聡
12/26 大城 紀美子

















Funeral 葬儀

眠った人々のことについては、
兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。
あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことがないためです。
私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。
それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々を
イエスといっしょに連れて来られるはずです。（I テサロニケ 4・13〜14）

















マーブルケーキ





用意する道具

クグロフ型（パウンド型でも良い）
泡だて器、ボール2個、へら、茶こし

マーブルケーキ材料

小麦粉　250 g
バター　125 g（有塩でもよい）
砂糖　125 g
卵　2個
ベーキングパウダー　小さじ3
ミルク　65cc
塩　少々（有塩バター使用時は不要）

ココア生地用の材料
純ココア　大さじ1.5
砂糖　小さじ1
ミルク　小さじ2



ビッキーのケーキづくり

二色の生地が織りなすマーブル模様は、
ケーキが焼き上がってナイフを入れたときに初めてわかります。
さて、どんな模様が現れるのか、さっそく作ってみましょう。

作り方

1
材料を常温にもどしておく
小麦粉とベーキングパウダーは合わせてふるっておく
型にはバターをぬっておく



2
バターを入れクリーム状になるまで練り、砂糖を数回に分け入れ白っぽくふっくらするまで丁寧に混ぜる



3
卵を1つずつ入れ混ぜる
塩を加える



4
振るっておいた粉を数回に分け入れ、少しずつ入れ混ぜる



5
ミルクを少しずつ入れ、なめらかになるまで混ぜる



6
生地の半分を別のボールに移し、片方の生地にココアを茶こしで振るいながら入れ混ぜる
砂糖とミルクを入れ混ぜる



7
2種類の生地ができるスプーンなどで、2つの生地を交互に型に入れる



8
かなりふくらむので型の6分目くらいまでの量でちょうどよい



9
はしを垂直に立て、小さく円を描きながら一周させる





10
180℃で約30分間焼く
焼き上がりは竹串をさして確認する



11
熱が取れてから粉砂糖を振るうときれいです